

マツダ財団支援

市民活動報告書

第35回（2019年度）

「マツダ財団支援 市民活動報告書 第35回（2019年度）」発刊について

当財団では、設立趣意書に込めた「人々が共に繁栄を分かち合い心豊かに生きることのできる社会づくりに寄与する」ことを目的に、「科学技術の振興」と「青少年健全育成」を2本の柱として様々な支援を行っています。

この報告書は、当財団より2019年度に支援を受けられ青少年健全育成に取り組まれた市民団体の活動を紹介するものです。

当該市民活動支援は、次代を担う子どもたちが、いろいろなことに興味を持ち多くの感動を得ることのできる体験機会の提供や地域社会のコミュニティづくり等に尽力されている非営利市民団体による諸々の活動に対して支援しています。

- 対象分野
- ・ ボランティア育成
 - ・ 災害復興・災害対策に関する活動
 - ・ 地域連帯、コミュニティづくり
 - ・ 青少年の居場所づくり
 - ・ 自然とのふれあい
 - ・ 国際交流・協力
 - ・ 科学体験・ものづくり

支援金総額 800万円 （10万円～50万円/団体）

支援件数 32件 （本報告書には、前年度台風で実施が延期された団体を含め33団体の活動報告を掲載しています。）

支援期間 2019/4/1～2020/3/31

活動地域 広島県・山口県

なお、報告内容は、各団体から提出されたものです。

も く じ

1. 活動報告書

ページ

No.	活動名	団体名	地域		
1	「地域全体で子育て・親育ち応援!!」～地元を愛し、お互いに元気になろう～	府中町家庭教育支援チーム「くすのき」	広島県	安芸郡府中町	1
2	お宝野菜に学ぶ伝統料理の継承と循環型社会	Team JIN「仁」(呉市市民公益活動団体)	広島県	呉市	3
3	A I に負けない子供育成プロジェクト ～子供達で耕作放棄地から味噌販売～	チーム豆っこ	広島県	東広島市	5
4	小学生対象の感動を与えるプログラミング教室	近畿大学工学部 教育情報システム研究室	広島県	東広島市	7
5	持続可能な地域創造	NPO法人 フリースクール木のねっこ	広島県	廿日市市	9
6	発達障がい音楽療法グループ にこにこ音楽・アンサンブルクラブ	三原音楽療法研究会	広島県	三原市	11
7	本と多様な価値観に出会う居場所づくり活動	私設図書館「さんさん舎」	広島県	尾道市	13
8	不法投棄の川を観光地に変えたボランティア	堂々川ホタル同好会	広島県	福山市	15
9	子どもたちの力でふるさと再発見 ～つたえよう、ひろめよう備後緋音頭～	備後緋音頭をつなぐ会	広島県	福山市	17
10	芸北小ふるさと夢プロジェクト ～教室はわたしたちの町～	芸小と山の匠たち	広島県	山県郡北広島町	19
11	子どもから高齢者まで誰もが集える地域の居場所づくり	矢野の家	広島県	広島市	21
12	フリースクール おくはた分校	フリースクール おくはた分校	広島県	広島市	23
13	自律型ロボット競技大会の開催とこれを通じた次世代ボランティア人材の育成	ロボカップジュニアジャパン広島ブロック運営委員会	広島県	広島市	25
14	地域を愛する青少年の養成を実現する 防災士による地域防災活動	広島市防災士ネットワーク	広島県	広島市	27
15	輝楽希楽列車 (きらきられっしゃ)	佐伯文化芸能振興会	広島県	広島市	29
16	発達障がい児を自分のスペシャリストに!	一般社団法人 クローバーの会	広島県	広島市	31
17	“space to find treasures!” (宝物を見つける場所)	しもJOY	広島県	広島市	33
18	SKCアカデミー ～発達障がいを持つ児童生徒対象サッカー教室展開事業～	一般社団法人 日本発達支援サッカー協会 (JDSFA)	広島県	広島市	35
19	絵本と紙芝居のコラボで感性の種まき	絵本たねまき塾	広島県	広島市	37
20	子どもたちに夢と希望を! プロジェクト	ピアサポート子育て相談センター	広島県	広島市	39
21	親子ではじめるサバイバル教室	アウトドアコミュニティ ハンターキッズ	広島県	広島市	41

No.	活動名	団体名	地域		
22	育て！拡がれ！未来の地球 ～ミニソーラーカー工作教室～	宇部市地球温暖化対策ネットワーク	山口県	宇部市	43
23	「温故知新プロジェクト」若い力で私達の街を国際学園都市へ発展させよう！	NPO法人 ワン・フォー・オール	山口県	宇部市	45
24	ものづくり科学教室	日本宇宙少年団 周南分団	山口県	周南市	47
25	地域社会と連携した子育て健全育成サポート	日立のぞみ会	山口県	下松市	49
26	おごおりウィークエンドアドベンチャー	おごおりウィークエンドアドベンチャー実行委員会	山口県	山口市	51
27	山災塾（若者対象災害ボランティア育成プロジェクト）	災害復興支援団体 山口災害救援	山口県	山口市	53
28	理系子ども育成応援活動	NPO法人 山口科学技術子供フォーラム	山口県	防府市	55
29	こどもまちづくりプロジェクト2019 ～未来へつながろう「こども議会」～	公益社団法人 防府青年会議所	山口県	防府市	57
30	『とりでこども食堂』『とりでモーニング』『とりで塾』『退所児童等アフターケア事業』	特例認定NPO法人 とりで	山口県	岩国市	59
31	虹の鯉のぼりプロジェクト	虹の鯉のぼりプロジェクト実行委員会	山口県	光市	61
32	わくわく土曜塾 ～多世代交流と国際交流～	わくわく土曜塾実行委員会	山口県	長門市	63
33	芦田川きれい☆きれいプロジェクト「芦田川 水辺の学び舎」	芦田川環境マネジメントセンター	広島県	福山市	65

2. 贈呈式

i

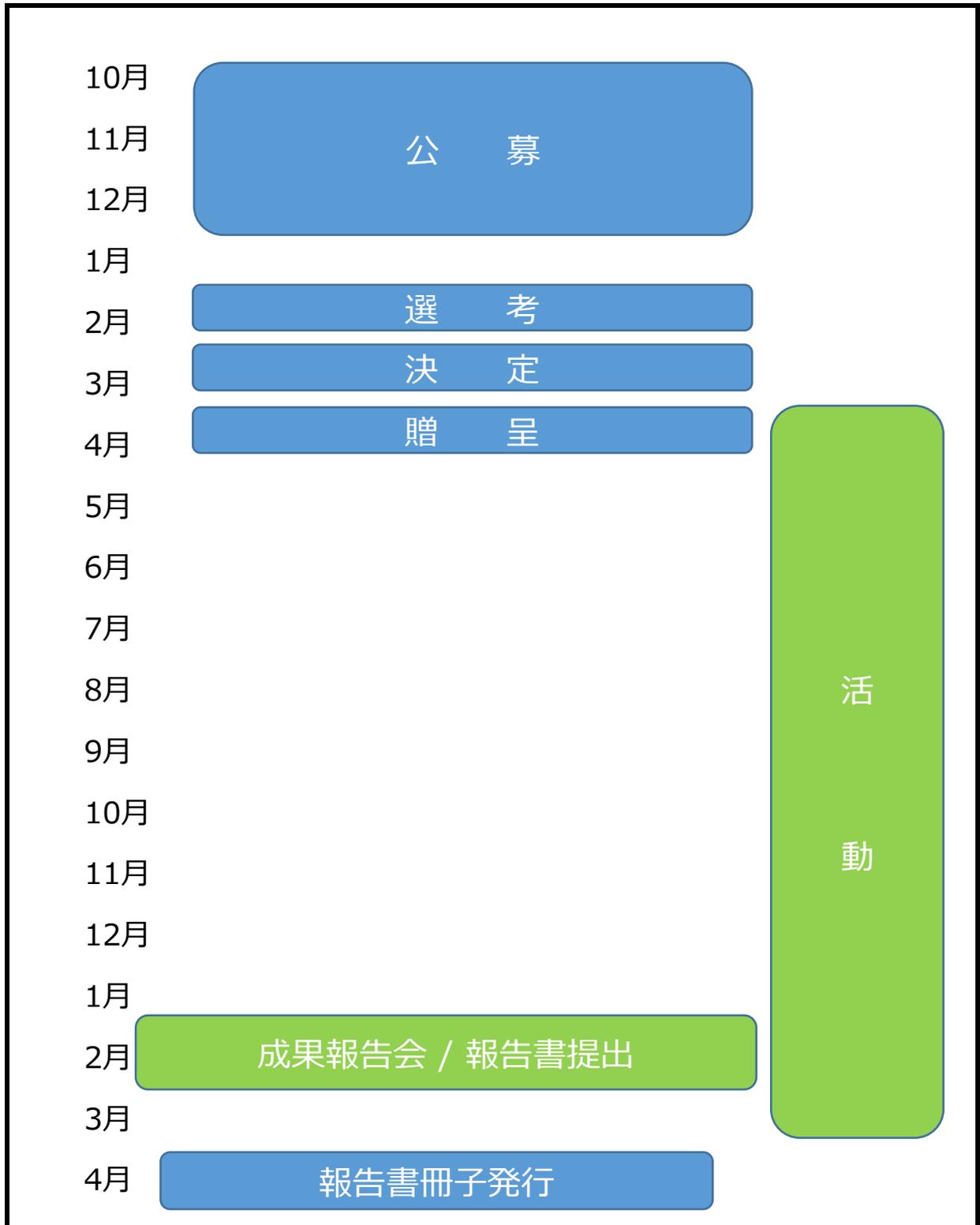
3. 成果報告会

ii

4. 応募＆採択に関するデータ

iii

＊ 公募～報告書冊子発行までの流れ



活動名	No.1	団体名	家庭教育支援チーム『くすのき』
「地域全体で子育て・親育ち応援!!!」 ～地元を愛し、お互いに元気になろう～		活動拠点	広島県安芸郡府中町
		代表者	米田 珠美
		支援金額	20万円
活動概要			
①依頼による「親プロ」 前年度通り継続。(町内の幼保小中高校など)44回 <u>参加者合計 943名</u>			
②府中南小学校における「しゃべり場」 前年度通り継続。(月1回程度)9回 <u>参加者合計 107名</u>			
③拡大事業 <u>参加者合計 189名</u>			
・南交流センター「育児相談」(月1回)、北交流センター「手芸としゃべり場」(不定期)			
④ファシリテーター養成講座・ステップアップ研修会 場所:くすのきプラザ			
・養成講座 日時:6月28日、7月12日 <u>参加者合計 10名</u>			
・ステップアップ研修 日時:7月17日、2月22日			
⑤不登校・引きこもり家庭への支援			
・町内の中学校との連絡会議 (M中:5月30日、F中:5月8日)			
出席者:校長、教頭、SSW、SC、適応指導教室・不登校担当教員、養護教諭、 社会教育課職員、家庭教育支援チーム「くすのき」コーディネーター			
・カフェくすのき H31.4月～R2.3月(月1回程度) 場所:青少年文化センター			
開催日時:4/14、6/29、7/25、9/8、10/5、11/9、1/25 <u>参加者合計 78名</u>			
・クッキング&ランチパーティー 9/8、1/25 場所:青少年文化センター <u>参加者合計 22名</u>			
・夏休みチャレンジ(地域未来塾事業) 学習支援 町内小中学校 14回 <u>参加者合計 255名</u>			
⑥新規事業			
・「親どうしが語り合う会」(月1回程度) 場所:くすのきプラザ			
開催日時:6/11、7/9、8/20、9/10、10/8、11/12、1/21 <u>参加者合計 70名</u>			
講演会:これって不登校?…焦りと不安 日時:12月21日 10:00～ <u>参加者合計 14名</u>			
講演会:心理カウンセリング講座 日時:2月14日 10:00～ <u>参加者合計 14名</u>			
・9ヵ月健診での託児(毎月3箇所で開催)			
子育て世代包括支援センター実施の9ヵ月健診で参加の兄弟を託児することにより、チームの周知(パンフレットやマグネットシートの配布)や不安を抱える親子の早期発見を目指す。			

「親の力」をまなびあう学習プログラム
 広島県が開発した子育てについて交流しながら学び合う「寄って、話して、自ら気づく」参加型の学習プログラム

平成30年度 活動実績
 実施回数:44回
 受講者数:1,030名

令和元年度 活動実績
 実施回数:44回
 受講者数:943名

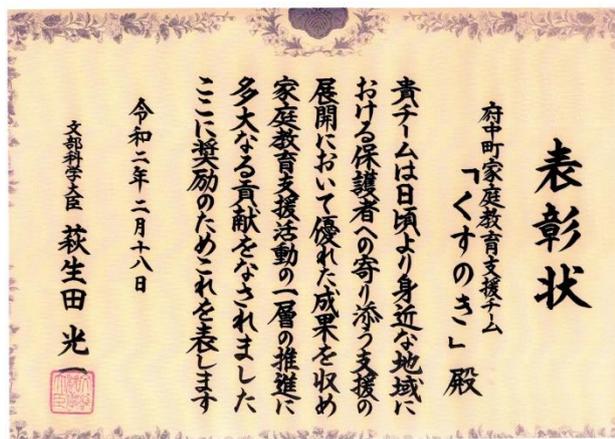
※地域課題に応じたオリジナル教材の作成




不登校児童生徒の保護者への支援

- 親子で参加できる『クラフト&しゃべり場』を組み合わせた不登校支援カフェの定期開催(月1回)
- 『親の会』の開催(月1回)
- 講演会



令和元年度「家庭教育支援チーム」の活動の推進に係る文部科学大臣表彰を受けました。

◆実施に伴う効果

財団の支援により始めた「カフェくすのき」が支援の入り口として定着し、学校や地域で認知されはじめたので、その次の段階として、今年と同じ悩みを持つ保護者が周りに話せなかった本音で語り合い、学習する『親どうしが語り合う会』を立ち上げ定期的に開催できるようになった。会を重ねるごとに沈んでいた保護者の表情が明るくなり、ほとんどの保護者が欠かさず参加される。それぞれの出口を模索する動きが活発になり、中には私立高校から通信制高校へ転向したり、学校に登校できる日が増えたりする児童・生徒も出てきた。改善傾向にある保護者の体験談が、暗中模索の保護者にとって、暗闇に差し込む光となっているようで、積極的に質問する姿が見られるようになった。

また今年度は「ネウボラふちゅう」（福祉課、子育て支援課）との連携を深めている。毎月、町内の3か所で行われる9か月健診に託児協力する形で、チームの周知や気軽に相談ができる関係づくりを進めている。乳幼児期から情報を共有することで、早期に子育ての悩みを抱える家庭を発見し、子育ての悩みに寄り添えるようにしたい。

◆苦勞した点

支援の入り口である「カフェくすのき」に初めて参加するというのが、保護者にとってはハードルが高いようである。また、仕事が忙しくこういった場に出る余裕のない保護者もいる。一度参加していただければ、毎回のように参加してくださる保護者がほとんどで、最近は友人を誘ってくださる保護者も出てきた。しかしながら、まだカフェの存在を知らない保護者も多いようなので、学校から手紙を渡していただく方法や周知に工夫をしているところである。

◆今後の課題・発展の方向性

まだまだ支援を必要としている家庭がたくさんある。福祉保健部や学校などとの連携をさらに強化することで、支援の必要な家庭の早期発見に努め、SNSやITCを活用し、本当に支援が必要な人に支援の情報等が届く仕組みを作りたい。

不登校の低年齢化が進んでいる。登校しぶりなど、長期の不登校になる前に登校を促すかわりをしていきたいと思う。アウトリーチについても進めていきたい。

また、ファシリテーターの資質向上や『親プロ』の継続により、切れ目のない家庭教育支援の充実を図り、後継者育成にも努力していきたい。

◆活動を終えての感想・意見等

マツダ財団に支援いただいたことで不登校支援を始めることができ、3年継続する中で、色々な機関と連携し、情報を共有できるようになった。学校や行政からも信頼を得ることができ、相談されるケースも増えてきた。ハイリスクな家庭にアプローチも必要であるが、問題が起こってからでは解決が難しいと感じる。すべての子育て家庭へのポピュレーションアプローチを並行して進め、子育ての悩みが浅いうちから支援していきたいと思う。

今年度、これまでの活動を評価していただき、2月28日に文部科学省にて大臣表彰を受けることができた。マツダ財団に支援していただくことで、活動を広げることができたことが大きかったと思う。3年間のご支援により芽吹いた若木をさらに大きくたく育てていきたいと考えている。たくさんのご支援、本当にありがとうございました。

団体名	Team JIN「仁」
活動拠点	広島県呉市
代表者	平中 哲朗
支援金額	28万円

活動目的

- ◇ 広島の伝統的な野菜の生産量の減少 ⇒ 郷土料理を食べる機会の低下や食の欧米化
- ◇ 近代農業（化学肥料・農薬利用）の定着 ⇒ 野菜のミネラルや微量栄養素の減少および季節感の希薄化

子どもたちを「食や農を取り巻く環境の劣化」より守るため

活動内容

- ◇ 子どもたち自らが広島お宝野菜（伝統野菜）を栽培してみる ⇒ 4月～9月 延べ120名
- ◇ 持続可能な農業＝循環型社会を学ぶ ⇒ 濃縮堆肥で土づくり＝濃縮堆肥は野菜くず1.8トンのリサイクル！！
- ◇ フランス料理シェフ、パティシエによる創作料理とスイーツを味わう ⇒ 9月 40名の親子で料理講座を受講！！
- ◇ 加工食品＝ふりかけ、味噌をつくってみる ⇒ 食への関心と探求を親子で体感 ⇒ 12月、2月 延べ40名

活動模様

4月 種をおなかで温め発芽させます（約4日）



4月 濃縮堆肥300kg（野菜くず1.8トンのリサイクル）をつかって土づくり



5月 菜園に定植します



お宝野菜に学ぶ伝統料理の継承と循環型社会の実現

7月～9月 青大キュウリ、九陵オクラ、下志和地青ナスを収穫



9月 フランス料理シェフの料理、パティシエの創作洋菓子を学び、試食



キュウリのレアチーズケーキ
キュウリのコンポート

ナスにのせたミートローフ

キュウリとジャガイモのポタージュ

モニターを利用した料理講座

お魚とオクラ・焼きナスのタルタル

2月 加工食品づくり（味噌、ふりかけ）



発酵食品物知り博士より味噌づくりを学ぶ

大豆のミンチ加工と仕込み味噌

乾燥野菜で
ふりかけ

活動の成果と今後の課題

- ◇ 種から栽培した野菜を収穫、調理して食するまでのプロセスを体験し、学び楽しむことで伝統野菜への理解と関心が深まった
- ◇ 野菜くずをリサイクルした堆肥で土づくりを実践したことから、持続的な社会（農業）の実現の一端を学ぶことができた
- ◇ 農薬や化学肥料を使用していない野菜を扱う小売店・飲食店と消費者による価値創造とそれらへの共感者の増大が望まれる

活動の展望

- ◇ 地球温暖化防止、SDGs推進等の世界的な潮流を身近で体感、実践できるような地域・学校ぐるみの活動の持続的な開催
- ◇ 生産者・飲食店・子どもを含む消費者が、ともに学び楽しむことができるプラットフォームの構築と新たなコミュニティの創造
- ◇ 子どもたちが地域の特色ある農水産物について学び、得た知識を年少の子どもたちに伝える、という文化伝承活動の推進

活動名	No.3	団体名	チーム豆っこ
A I に負けない子供育成プロジェクト ～子供達で耕作放棄地から味噌販売～		活動拠点	広島県東広島市
		代表者	小田 悦子
		支援金額	30万円
活動概要	<p>A I が進化するにつけ、これからの子供達には、記憶する学習よりも、① A I にとって苦手な「読解力」を磨く、② 五感を使って感性を育む、③ 正解のない問題に向き合う、といった三つが大変重要になるのではと言われており、「教える」から「学ぶ行為を支える」へ転換していくなど、教育にとって非常に大きな課題となっております。</p> <p>子供達に、耕作放棄地の再生を初めとして、土づくりから商品販売まで一連の流れを体験してもらい、将来、A I 到来の時代においても、逞しく生きることが出来る人になれるようにと支援しました。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・実施日：第1回（4月18日）～第14回（1月22日） ・実施場所：第1～12回は河内町中河内大道地区の畑 第13・14回は小田地区多目的集会施設（東広島市河内町小田 2517） ・活動内容：オリエンテーション、耕起、有害獣防止柵の設置、大豆植え、苗移植、草取り、刈り取り、藪掛け、収穫、選別、味噌づくり、講習会、デザイン（商品パッケージ、チラシ）、販売 ・参加者：チーム豆っこ（4名）、河内小学校4年生（14名）・教諭（2名） ・支援者：J A 広島中央河内グリーンセンター（1名）、おだ・ビーンズ（3名）、広島県食品工業技術センター（2名）、地域協力者（3名） ・参加人数：延べ190人 		



畝づくり



大豆苗植え



刈り取り・藪掛け



味噌づくり

◆実施に伴う効果

子供たちに、①「読解力を磨き」、②「五感を使って感性を育み」、③「正解のない問題に向き合う」、④「プロから職について学ぶ」ことを体験してもらい、将来のA I 到来の時代においても、逞しく生きることが出来る人になれるようにと支援してまいりました。そのうちで、子供たちと一緒に活動したのは8回延べ18時間でした。

目的を達成するために4つの項目を掲げておりました。その項目毎に効果を考えてみました。

- ① 「読解力を磨く」については、どのようにしたら上手いかなどを子ども同士が話し合いながら作業するとともに、プロからのアドバイスをしっかり聞いていたように思えます。
- ② 「五感を使って感性を育む」については、畑で作業することにより、空気、風、土、植物などと体全体で触れ合うことにより、五感を育ててくれたものと思っております。例えば鍬で土を耕せば土の匂いを嗅ぎ、草取りをすれば草や虫の色を見たり、ほのかな野菜の匂いを感じるとともに手に虫が付いて動き回り、米麴を混ぜたら発酵効果で暖かく感じるなど、感性をしっかり育ててくれたものと思っております。
- ③ 「正解のない問題に向き合う」については、野菜づくりでは、土、太陽、雨、虫に左右されるため、こうした方がよいという正解はなく、その都度に合わせた方法を模索する必要があります。多少なりそういった課題に立ち向かう体験ができたのかなと思っております。
- ④ 「プロから職について学ぶ」については、JAの営農指導の方や食品工業技術センターの研究者が論文などの根拠を持って論理的に説明をしたり、自分の仕事のやりがいについて話をして貰いましたが、4年生にはちょっと難しかったかなと感じました。しかし、将来思い出してもらえればうれしいです。

このように、色々な効果があったもの思っております。

◆苦労した点

- ・子供たちと一緒に出来るのは、授業の関係上、月1回が限界であり、その中間での、耕起、苗の育成、除草、櫛の雨対策、大豆の選別、味噌づくりの仕込みなど、想像していた以上の作業が必要で大変苦労しました。
- ・畑に行く里道で子供が溝に落ちて骨折してしまいました。（工事業者の不適切な処置が原因でした。）けがをしないよう、特にマムシや蜂には十分注意をしていましたが、活動する場所だけでなく、その経路についても安全確保の必要性を感じたところです。

◆今後の課題・発展の方向性

- ・女性だけのグループで実施するには重労働が多く少し重荷だったように思えます。今後は男性にもグループに加入してもらえよう、勧誘していきたいと思っております。
 - ・令和2年度の活動については現在模索中ですが、次の内容のことを小学4年生と一緒に活動施できるよう、河内小学校と調整する予定であります。
- ① 落花生栽培及び商品化（文化展で販売）
 - ② 綿花のテスト栽培&コースター試作（収穫したオーガニックコットンをつむいで、野草を使った草木染めとオリジナルコースターづくり）

◆活動を終えての感想・意見等

- ・子供たちが、無農薬有機野菜で大豆を育て、それを使った味噌づくりができたことに、大変喜んでいました。その時のキラキラした目を見て、将来A I に負けない逞しい大人になってくれるものと信じた。
- ・4年生と一緒に活動することはあと2回となりましたが、もっともっと色々な体験をさせてやりたいと感じました。
- ・現在の子供たちの人生を考えた時、学校で教科書を見て覚えたりするより、今回のような体験をもっともっとすることが、大切なのではと改めて実感しました。
- ・これからも子供たちがワクワクするようなメニューを考えて取り組みたいと思っております。

活動名	No.4	団体名	近畿大学工学部 教育情報システム研究室
小学生対象の感動を与えるプログラミング教室		活動拠点	広島県 東広島市
		代表者	加島 智子
		支援金額	45万円
活動概要	<p>子供達は自ら自発的に調べること、考えること、調べる機会も奪われてきています。年齢層の様々な人と触れ合い、関わりを持ち、その中で学ぶ環境を継続的に持つ機会を作り、感動を経験させたいと考えて取り組みを行ってきました。遊びの中でプログラミング的思考を学ぶ取り組みを行う場を提供するため、大学生が学習した内容を生かしてイベントの詳細な内容、教材の開発、イベントの評価を考えて取り組みました。地域の人へ還元し社会との関わりを考える場になり大きな反響をいただきました。</p> <p>【実施の詳細】</p> <ul style="list-style-type: none"> ● 6月 8日: 近畿大学工学部（東広島市）午前（120分）12名，“ロボットで簡単！プログラミングを体験しよう” ● 6月27日: YMCA（東広島市）視察とプレレッスン実施，12名，プログラミングカーでの遊び体験 ● 8月19日: 観音台公民館（広島市）午前（120分）12名，“ロボットで簡単！プログラミングを体験しよう”，広島工業大学学生，(株)ヒロケイ様との関わりも含む ● 11月9日: 東広島芸術文化ホール（東広島市）午前（120分）16名・午後（120分）16名，“ロボットで簡単！プログラミングを体験しよう”（プログラミングカーを使ったアンブラグドとタンジブルを用いたプログラミング体験）東広島市教育委員会などの視察有り 		



図1. コマを用いたプログラミング体験
(手動による具体的な操作を用いた実施)



図2. プログラミングカーを用いたアンブラグドのプログラミング
(PC やタブレットを用いずに命令を具体的に手で触り学習)



図3. チーム対戦によるプログラミングゲーム
(初めて出会ったメンバーとのグループ作業による協調性の育成)



図4. 参加者の集合写真
(2019年8月19日 観音台公民館にて)

◆実施に伴う効果

「プログラミングに対する興味関心を引き出し、感動体験を経験させる」という目的は達成することができました。

イベントでは募集定員を上回る応募もあり、プログラミング教育に対する興味関心を得ていることを感じました。見学に来た方、保護者を含める参加者にプログラミングの学習、特に論理的思考は**パソコンやタブレットを与えることでなく**、その考え方やその学びは身近なものを通じて意識させることで容易に学習できることであると伝えることができたと考えます。イベントで用いる教材開発やイベントの評価方法なども試行錯誤を重ねました。結果、コマを用いて手動での作業から自分の命令がロボットにより自動化する経験させ、子供達に喜びや驚きによる**感動体験**を経験させることができました。イベントは楽しく、特に、**プログラミングの一部の知識**などについてはアンケート結果を通じて一定の成果を確認することもできました。また、イベントを実施するにあたり大学生のメンバーは、子供の気持ちを考え子供にとって楽しいイベントにする、子供にとって理解しやすい内容にするために自らも学習をして知識を付けるなど相乗効果もありました。更に、企業の方への相談をすることで新たな学びへと繋がりました。初対面の子供同士、子供とスタッフ、スタッフ同士、企業の方との良い交流の機会も生まれました。

◆苦勞した点

論理的な思考、プログラミングの知識を身に付けるという事に関しては1回限りのイベントにおいて子供達に身に付けさせることは不可能であると考え、メンバーを集め、同一の子供たちと継続的にプログラミングを学習する取り組みも実施を予定していました。東広島市の学童保育による実施を検討して何度も東広島市との電話・メールなどを重ね議論をしてご協力いただきました。また、民間の学童保育などにも視察や相談に行きましたが実施ができませんでした。

【問題点】学童保育では様々な人がいるため実施に対する**保護者の理解**や**市の理解が難しい**（時間がかかる）

1回限りのイベント募集を実施しても定員を超える多くの人が集まり、継続的な実施を希望するとの意見をたくさんいただきますが、学生を中心とした私たちのみの小さな組織だけで場所を確保して継続的な実施を行うことが困難なため市などとの協力による実施が理想だと考えましたが1年では多くの問題に対するすべての解決策を見つけることができませんでした。今後は様々な活動団体や組織と協力して実現させたい取り組みです。

◆今後の課題・発展の方向性

これまで進めてきたプログラミングに関わるイベントの実施を継続して行っていきたいと考えております。1回限りのイベントも、定期的な学習支援も地域の人と協力して進めていきたいと思っています。また、現状では大学という組織であるため実施するメンバーが1年ごとに交代する状況です。知識や経験が蓄積されて生かされるような体制作りを整えたいと考えて下ります。また、私たちがイベントを実施しなければ学習支援ができない状況です。しかし、今後は教材を確立させて一定の知識があれば誰にでも同じ内容のイベントを実施し、家庭内においても継続的に学習ができる環境を作りたいと考えております。

◆活動を終えての感想・意見等

今回の財団での成果報告会からも感じたのですが、家庭環境が子供の学習能力と学習環境、もっと言うと人生に大きく影響することを改めて感じました。海外の恵まれない地域、貧困による学習の機会を望んでいるのに機会が得られない子供達がいる一方で、日本は誰もが読み書きはできるのに学習に対する興味関心が薄く、学ぶ目的が持てない子供、保護者の思いが強く負担になっている子供、学習イベントを託児所代わりに利用し、子供の学習に興味を持たない保護者など多様な家庭環境を目の当たりにしました。保護者の知識や考えによらず、多くの子供に平等に学習の機会を与えてあげたい、学ぶ目的を見つける機会を作ってあげたいと思いました。今後もこのような学習イベントを通じて私たちにできることから少しでも地域の子供達へ貢献できればと思いました。

活動名	No.5	団体名	NPO 法人フリースクール木のねっこ
持続可能な地域創造		活動拠点	広島県廿日市市
		代表者	岸岡 美由紀
		支援金額	22万円
活動概要	<p>実施日：令和元年 11月1日～12月20日</p> <p>場所：広島県廿日市市上平良 フリースクール木のねっこ活動場所（もーりいはうす結 youi）</p> <p>内容： フリースクールの活動場所に、五右衛門風呂の湯屋を建設しました。 地域の DIY の得意な方に、施工・ご指導いただき、フリースクールの子どもたちやボランティアの方と共に 試行錯誤しながら創造しました。</p> <p>参加人数：大人8名、子ども7名</p>		



基礎も柱も本格的。ボランティアの方も一緒に作業。



子どもたちも、ちょくちょく見に来ては、お手伝い。



ペンキ塗り作業。施行・指導の地域の方と、すっかり仲良し



完成した湯屋で足湯。五右衛門風呂、薪焚きのお湯はあったまる！

◆実施に伴う効果

お風呂に入れるようになると、講師やスタッフが宿泊しやすくなり、より多様な人がフリースクールを訪れ、交流することができます。こどもは多様な大人から学び、経験を積み、自立に向かいます。

また、現代社会にとって必要な、エコな昔体験を日常的に行うことができます。

地域の方とこどもたちとの交流、知恵や工夫、試行錯誤を共に経験することができ、こどもたちは学びを深めることができます。

◆苦労した点

- ・当初、施工をお願いしていた方が怪我のため、施工ができなくなり、代わりの方を探すこと
- ・予算内におさめるため、材料の一部に廃材を加工して利用すること
- ・五右衛門風呂の薪をくべる部分を作るのに、鉄を加工し土台を製作して頂いたが、構造上炎が当たる部分が狭くなってしまったため、焚口を広くする工夫

◆今後の課題・発展の方向性

試行錯誤し創作することを通じて、学校に行かない・行けない子どもが、自分らしくあるために経験を積み、自らの足で立って歩き、前進していく環境づくりを続けます。そうした子どもが、心身ともに健全で自分らしさを発揮し、社会で生きていく力を養うことができると考えます。

宿泊可能となったフリースクールでは、福祉・教育・地域・国籍・障害の有無を越えた幅広い人々とのつながりを持ちながら、個性豊かな循環型社会づくりのために利用していきます。

◆活動を終えての感想・意見等

予算の関係で、廃材を利用することになり、あるものを工夫して使う知恵を、学ぶことができたのは、当初予想していませんでしたが、幸いでした。

地域の方とこどもたちとの関係性も、一緒に湯屋を創造することを通して、相互に理解しあえるようになり、そのことも、わたしたちにとって、大きな喜びとなりました。

2年連続で助成をいただき、ありがとうございました。

活動名	No.6	団体名	三原音楽療法研究会
発達障がい音楽療法グループ ここに音楽アンサンブルクラブ		活動拠点	広島県三原市
		代表者	吉岡 由美子
		支援金額	13万円

活動概要

2019年 6月1日	三原市総合福祉センター2階	まちづくり活動ルーム	体験セッション	参加者 10名
7月6日	同上		セッション①	参加者 8名
8月3日	同上		セッション②	参加者 7名
9月7日	同上		セッション③	参加者 9名
10月5日	同上		セッション④	参加者 6名
11月9日	三原市総合福祉センター4階	第4会議室	セッション⑤	参加者 7名
12月7日	三原市総合福祉センター4階	第2研修室	セッション⑥	参加者 7名
2020年 1月11日	三原市総合福祉センター4階	第1教養娯楽室	セッション⑦	参加者 8名
2月15日	同上		セッション⑧	参加者 6名
3月7日	(予定)		セッション⑨	

内容：音楽療法士、広島県立大学福祉学部の学生も交えたグループでの音楽活動で、対象者のニーズに合わせた音楽活動を選びながら、対象年齢層に対応した楽器を使用した。集団においてこそ得られる力を利用して、長期目標は、対象者の社会的自立を目指すこと、短期目標は音楽活動を通じて、創造力、想像力を刺激し、自己実現・感情表現を豊かにすることである。



歌詞を読み、サウンドシェイプの説明



季節の歌で発声練習



サウンドシェイプを使つての合奏



デスクベル

◆実施に伴う効果

事前登録をすれば予約は不要としたことで、無理のない参加ができるようになった。

プログラムは参加者に合わせて考えたものを選んで組み、目的を達成するために、十分な準備をした。

参加者と同年代の福祉学部の学生も参加したことで、和やかな雰囲気になり、自分を表現しやすい場になったと考える。

体験セッションを含め現在まで、9回のセッションを行った結果、はじめは新しいグループへの参加が難しかった方も、自由に発言できる雰囲気に慣れてきて、お互いを気遣い、仲間として認める様子が見られるようになった。

また、介護者や保護者同士の情報交換の場にもなっており、お互いに連絡を取り合う、他の保護者へ紹介する等、輪が広がってきていると感じる。

自由に参加できる場、余暇を楽しく過ごせるような落ち着いた居場所づくり、仲間との穏やかな活動の中で自分を表現できる場所の提供ができた。

◆苦労した点

建物の改装の関係で当初予定していた部屋が使用できなくなり、変更を余儀なくされた。変化に対応するのが難しい参加者もあり、混乱せずスムーズに移行できるように、十分な対策を考えた。

参加者を集めるための活動に苦労した。発達障がいの子どもの対象の「にこにこ音楽クラブ」卒業生や、市内の作業所、支援学校などに、チラシを送付したが、思っていたほどの効果がなく、口コミでの参加者のみであった。

今後は、SNS等の広報活動も考える必要があると思う。

◆今後の課題・発展の方向性

この「にこにこ音楽アンサンブルクラブ」が、定着してきたところで、その次の段階では、継続事業になるように、対策が必要である。参加費をできる限り抑え、参加者増につながるよう SNS での PR 方法も考えていきたい。

また保護者同士がゆっくりと話せる場を立ち上げて、定期的な開催ができればと思う。

◆活動を終えての感想・意見等

本会は 2007 年から発達障がいの子どもの対象とした「にこにこ音楽クラブ」を続けてきた。

2019 年度はマツダ財団からの支援を頂き、思春期、青年期の障がいを持つ高校生以上を対象としたグループ音楽療法「にこにこ音楽アンサンブルクラブ」を発足させることができた。対象年齢層に対応した楽器を揃えることができ、今後も活動の充実につながっていくと思う。

また、マツダ財団主催の交流会や、報告会などの行事に参加させていただいたことにより、新たな出会いやご縁が増え、良い刺激を受けることができた。本会の活動の幅が広がっていくと思う。

活動名	No.7	団体名	私設図書館「さんさん舎」
本と多様な価値観に出会う 居場所づくり活動		活動拠点	広島県尾道市
		代表者	瀬戸 房子
		支援金額	24万円
活動概要	<p>子どもたち、大人、そして不登校児や悩みを抱える人たちの居場所としての図書館の無料開放をしています。また、本から知り得る世界で新たな発見、考え方などに触れることもできます。また、多種多様な考え方や働き方、生き方の人と出会うきっかけの場作り（イベント）をし、人生の選択肢や価値観を広げる活動を行なっています。</p> <p>◎通常図書館オープン…</p> <p>尾道市向東町 1012-23 私設図書館「さんさん舎」1 階 2019.4月～2020年1月末（10ヶ月）利用者：大人 341人、子ども 271人 306日のうち176日間オープン（1日あたり2～9時間開放） *オープン日時は、ボランティアスタッフの都合により毎月毎日異なるため、店頭に掲示、毎月のカレンダー発行、LINE、Facebookページにて行いました。</p> <p>◎ゲストトーク…</p> <p>尾道市向東町 1012-23 私設図書館「さんさん舎」1階もしくは2階 または向かいの尾道市向東町 1013-7gnomes「ノームズ」アトリエとキッチン 1階もしくは2階 「あなたはなぜ、今ここに」シリーズでその人の人生を聞く（各回6名～25名参加） 7/12 あなたはなぜ、今ここに「私と芸術」イガキアキコさん（音楽家）、岸田真理子さん（画家） 9/18 あなたはなぜ、今ここに「私と旅商い」昼夜二部制 富永浩通さん（旅する本屋「放浪書房」） 10/10 あなたはなぜ、今ここに「私とあなた～福祉と芸術の狭間から」 榎野展正さん（クシノテラス） 11/12 あなたはなぜ、今ここに「私と本のある場所」佐藤友則さん（ウィー東城店長）、高原康秀さん 1/31 あなたはなぜ、今ここに「私と生きる～作業療法の現場から」山口清明さん（NPO法人はびりす） *告知は店頭に掲示、毎月のカレンダー発行、LINE、Facebookページにて行いました。</p>		



私設図書館「さんさん舎」1F 図書館通常オープン時



10/10「私とあなた～福祉と芸術の狭間から」ノームズにて



11/12「私と本のある場所」さんさん舎 2F にて



9/18「私と旅商い」昼の部、さんさん舎 1F にて

◆実施に伴う効果

- Facebookや様々な媒体を通して告知、場を知ってもらうことで、ボランティアスタッフも増え週に4日程度図書館をオープンすることができた。
- また、オープン時には図書館を「無料」で開放することで、子ども一人でも気軽に来られる場、本を読んだり宿題をしたり、大人もふらっと立ち寄れる場となり、様々な交流が生まれた。
- 全国的に活躍するような、普段の生活ではなかなか出会うことのないゲストにお越し頂き、あえて少人数制で交流しやすく話しやすい場をつくった。
- 様々な大人の話聞き、子どもに対する大人の対応（考え方）を学ばせていただいた。
- 夏ごろから全国的な活動「とまり木」に登録し、不登校児とその親の居場所的な場とも知られ、その後も継続的に利用いただいている。

◆苦労した点

- なるべく毎日でも、長い時間オープンしたいが、アルバイトではないためスタッフの確保やスケジュール調整がなかなか難しい。
- 場をさらによく知ってもらうための告知をどのようにしたらよいか、毎日のオープンでないため、カレンダー作成や、メール配信など周知に時間と手間がかかっている。
- ボランティアスタッフのそれぞれの参加の気持ち、モチベーションも異なるが、個々の個性を活かしながら場をよりよくするためにはどうしたらよいか、という苦労もみられた。
- 空間としての場の整備（クーラー設置）、環境整備（本棚の追加）などにかなり金銭的自己負担が大きく運営面での障害となっている。
- 校区の学校から案内を配布していただくと思ったが、まだまだ駆け出しで信用度の低い市民活動団体ではなかなか対応していただけないことを痛感した。

◆今後の課題・発展の方向性

- 学校のニーズに沿った様々な居場所をまとめたマップを制作することで、改めて配布をお願いしようと考えている。
- 不登校児に有益な居場所であることを地域や学校にいかにか認知していただくかが課題である。
- これまでの活動を継続しつつ、不登校児の居場所としても、もっと認知されるように教育委員会やメディアを通して知ってもらう活動をしていきたい。

◆活動を終えての感想・意見等

- 今年度助成をいただいたことで心強く活動ができました。また、設備などに改善したい面もあり、今後の継続的なご支援をいただくと嬉しいです。
- 場を必要としている人たちにさらに居心地よく来て、過ごしてもらえるように今後も活動を続けていけたらと思います。



毎月のカレンダー掲示（さんさん舎正面ガラス）



中国新聞（福山尾三 面に掲載）2020.2.29 朝刊

活動名	No.8	団体名	堂々川ホタル同好会
不法投棄の川を観光地に変えたボランティア		活動拠点	広島県福山市
		代表者	土肥 徳之
		支援金額	22万円
活動概要	<p>① 堂々川中流域へ彼岸花を植える 御野小（120人弱）中条小（50人強） 4月末から5月の遠足時</p> <p>② 堂々川中流域へホタルを飛ばす 会員による川周辺の草伐採、児童とカワニナ放流 5月～11月</p> <p>③ 砂防堰堤の保全、草・木の除去 美観作りと大雨により石崖の崩れるのを防ぐ目的もある 蛇やスズメバチの活動がない11月終わりから2月にかけて実施</p> <p>④ 環境保全と川の汚れの防止 道路のポイ捨てタバコ・プラ等のごみ拾い、不法投棄の防止は各月の定例会の時と有志が別に月数回巡視している</p> <p>⑤ 児童が遠足や自然勉強の為の来訪を支援 県と相談し砂留資料を貰い学校へ渡す 神辺小 10月研修来訪</p> <p>⑥ 会報の発行 すでに過去15年間会員や官庁に配布、 広島県県立図書館に1号から177号まで保管 神辺の資料として使えるようになった</p> <p>⑦ 観光地案内を神辺町観光協会と共同で実施している 一昨年頃からは御領山古墳の観光も希望者には案内する 堂々川の彼岸花の敵（猪）を猟友会の支援で駆除を実施している 1昨年は10頭、昨年は3頭捕獲</p>		



ゴミ捨て防止策の彼岸花の里造り 御野小3,4年生と



観光地になった堂々川



新入会員高校生が見つけた新しい砂留



堂々川へ歴史の勉強 神辺小

◆実施に伴う効果

福山市長が提唱されるオンリーワンを目指す・探す・つくるに賛同し、堂々川にある国の登録有形文化財の砂留を生かすための活動を小学生と一緒に2010年から毎年実施している。今年（2019年）も2つの小学校と実施でき環境教育、故郷の景観を記憶できる思い出作りもできて、先生からは感謝をいただいている。

小学生と一緒に植えてきた彼岸花の花数が県内No1に近づいてきた。

19万本開花（県のトップは30万本）、又自然の川の堤防フィールドで見られる花色が24色は日本一という人も多い。7月から12月初めまで開花する姿が見られる場所も全国トップレベルと自負している。

「ボランティアが作った観光地」素晴らしいことだ。

◆苦勞した点

堂々川では特に11月頃から川の堤防斜面を猪に掘り返され、小学生と植えた球根が毎年日干しにされている。今年もすでに3か所が耕されその現場写真も取れた。1月、2月に掘られると球根を再度植え直しても活着率が悪い気がする。

また昨年は10頭捕獲したが今年は瓜坊3頭のみ、イノシシの学習能力に人間がついていけなくなっている。

◆今後の課題・発展の方向性

同好会へ高校生・大学生の入会があった。昨年度で高校生4人、大学生2人、一昨年は入会者に卒業論文にかかわる資料も提供したが、卒業後も活動を継続するというのは難しいようだ。

今後の発展は新しい入会員の考え次第だが、企業の定年が65歳過ぎまで伸びたせい、企画力のある人を探すのに苦勞している。しかし、会を継続し、発展させるためには、企画力のある人を探さねばならない。（行動力があり企画のできる人はNPOや他団体と奪い合いになっているようだ）

◆活動を終えての感想・意見等

今年も良い活動ができた。

ボランティアは資金確保をどうするかが最大の問題点！

当会の場合福山市のマチサポの方の事務支援、マツダ殿のご支援、予想外の表彰副賞で予定以上の活動が楽しく出来たことが良かった。

目標であり、願いでもある「観光地造りが出来た」ことに満足している。

活動名	No.9	団体名	備後絃音頭をつなぐ会
子どもたちの力でふるさと再発見 一つたえよう、ひろめよう備後絃音頭一		活動拠点	広島県 福山市/府中市
		代表者	河村 規行
		支援金額	10万円
活動概要			
<p>2019.2.23 昭和の歌と踊りの集い 新市公民館大ホール 子ども 8名 おとな 20名</p> <p>2019.4.27 新市中央中学校体育大会 2019 新市中央中学校グラウンド 子ども 3名 おとな 8名</p> <p>2019.5.25 新市小学校大運動会 新市小学校グラウンド 子ども 8名 おとな 12名</p> <p>2019.8.25 24時間テレビチャリティー愛は地球を救う 新市公民館大ホール 子ども 10名 おとな 15名 郷土芸能祭</p> <p>2019.9.22 初代藩主水野勝成入封 400年記念 福山城本丸舞台 備後入封 400年祭 台風の為当日中止</p> <p>2020.2.8 第11回備後ふくやま伝統産業展 福山市ものづくり交流館 子ども 9名 おとな 10名</p> <p>通年 第3土曜日 キラキラ子ども三味線教室 新市小学校キラキラコミュニティールーム イベント前土曜日 事前稽古 新市小学校キラキラコミュニティールーム</p>			



昭和の歌と踊りの集い



小・中学校運動会(新市小)



キラキラ子ども三味線教室



—24時間テレビチャリティー愛は地球を救う—郷土芸能祭



備後ふくやま伝統産業展

◆実施に伴う効果

子どもたちがふるさとの宝である歴史・文化に気づき、ふるさに愛情をもって地域で育てほしいという意味での活動です。芽が出、花が咲くのは先の先の話だと覚悟の上の取り組みですから結果を急いではいません。

その中でも子どもたちが楽しく稽古をがんばっているのは頼もしく感じています。

また発表の場では普段とは違った真剣な表情に変わり、いい演奏を披露しようという思いが伝わってきます。

披露の場での観客の反応—こんな小さな子どもたちが備後絃音頭を三味線で演奏しているという感激と喜びの表情—には感動します。

こういう場を子どもたちが度々経験することで、自分たちのやっていることがまわりに認められている、喜ばれていると感じることは、将来の人間形成の過程で大きな力となると確信しています。子どもたちはこの活動で多くの地域の高齢の方と接する場面に出会います。そこで生まれる経験で人に対するやさしさを学びます。

発表の場は主に自治体の主催するイベントとなり、その内容は観光、福祉、文化振興、地域振興など多岐にわたります。そのひとつひとつ違った分野の取り組みの中に少しの間でも身を置くことも有意義な時を過ごしていると思います。子どもたちは自ら経験することで学び、それが自分たちの暮らす自治体に少なからず貢献できていることもすばらしいことです。

◆苦労した点

今回、マツダ財団様より助成いただいたこと感謝申し上げます。

三味線という楽器について知識が乏しく、いざ三味線の補充・修理にとりかかってみると、その費用がこんなにかかるのかと驚きました。中古の三味線を知り合いから安く譲り受け、革の張替えについても安くやってもらえるところを探しお願いしました。

稽古については、短期間で上達する訳ではないし、2年3年かけて少し形らしいものになるくらいですから、子どもたちのモチベーションを保っていくことには心を砕いています。台風等で大きなイベントが中止になったこともあったのでその時のフォローには気がつかしました。

また、子どもたちの引率は事故があってはならず、いつも苦労するところです。期間後半から保護者の協力もいただけるようになり、少し気持ち的には楽になったと感じています。

◆今後の課題・発展の方向性

三味線に取り組んでくれる子どもたちも中学生から小学生低学年までになりましたが、同学年の参加が多く、学年での参加の差があることが気になります。学年によっては参加者がゼロという学年もあるのです。

また踊りについては、運動会では踊るのですが、三味線をやる子どもが唄も踊りも披露できるという形にしたいと考えています。それには参加者の全体数が増えることが不可欠なのでがんばりたいと考えています。

なかなか難しいことですが、現在の一小学校、一中学校だけの生徒児童の参加という現状を近隣の学区へ広げられないか模索中です。練習場所の距離や三味線の数が少ないという問題もあり工夫が必要です。

同時に子どもたちの活動を支える意欲あるおとなたちの仲間も募り、子どもたちとおとなたちが一緒にふるさに誇りをもつ地域にしたいと考えています。

◆活動を終えての感想・意見等

この活動の将来が少し明るくみえてきたのも、マツダ財団様の助成のお陰です。子どもたちは純粋で可愛いものです。我々も益々がんばらないといけないと感じています。

この活動は人をつないで継続していってはじめて成果の出る活動です。一年間の活動は終わりましたが、会の目的、目標はつなぐことです。

活動名	No.10	団体名	芸小と山の匠たち
芸北小ふるさと夢プロジェクト ～教室はわたしたちの町～		活動拠点	広島県山県郡北広島町
		代表者	國本 美幸
		支援金額	22万円
活動概要	<p>【活動の目的】</p> <p>○「ふるさと芸北」の「自然や人、文化・産業」に学ぶことを通し、芸北のよさを実感し将来ふるさとに貢献できる人材を育てる。</p> <p>○芸北小学校の教育活動全体で、子ども達に付けたい六つの資質・能力（意志力、自己回復力、協働する力、課題解決力、安心・安全をつくる力、多面的・多角的な見方・考え方）を育てる場とする。</p> <p>【内容】</p> <p>「総合的な学習の時間」や「生活科」で行う地域の「自然や人、文化・産業」に学ぶ体験的な活動を行う。その中で児童が多様な学習課題に対峙できるような学習場面を設定し、主体的に問題解決しながら自らの資質・能力を高めていく。（以下、主な活動の内容）</p> <p>◎「「やまランド」の活動」・・・校区の山に登る活動を4回行い、地域の山（自然）を知るとともに、「意志力」「自己回復力」「協働する力」を中心とした資質・能力の育成を図る。（1・2年生、生活科）</p> <p>◎「「山のめぐみ」の活動」・・・「山の樹木・手入れの仕方」、一昔前の生活に欠かせなかった煮炊きを使う「火を焚く」活動を通し、人々の知恵を知るとともに「協働する力」「課題解決力」「安心・安全をつくる力」「多面的・多角的な見方・考え方」などの資質・能力を育てる。（3・4年生、総合）</p> <p>◎「「せどやま教室」の活動」・・・広葉樹を切り出し、薪として活用するため地域の販売所（せどやま市場）へ売る活動を行い、自然の循環・木と人々の生活とのつながり・木を薪という商品とすることで地域の産業となること等を学ぶとともに、六つの資質・能力を育てる。（5・6年生、総合）</p> <p>【活動の日時・場所、参加予定者数等】</p> <p>①「雲月山山焼き」 日時・場所：4月第2土曜日、校区にある雲月山の山焼きの手伝いを体験し「里山」と人とのつながりや自然環境の保全について学びぶきかけ作りをする。 参加者：5年生12名・6年生16名・引率教職員5名・地域の皆さん</p> <p>②「稀少生物観察」 日時・場所：4月芸北の稀少生物「イワミサンショウウオ」「カワシンジュガイ」の観察 参加者：3年生9名「イワミサンショウウオ」、4年生12名「カワシンジュガイ」</p> <p>③「やまランド」 日時・場所：4月オークガーデン広場、5月清流の家 6月大佐山 10月高杉山 参加者：1年生12名・2年生8名・引率教職員4名 （6月・10月はボランティアガイド1名・中学生ガイド2名が加わる。）</p> <p>④「山のめぐみ」 日時・場所：5月、6月各1日【芸北みどりの広場】（樹木とその活用法・山の手入れ・焚木拾い） 7月 【学校校庭】（1回目火を焚き付ける活動） 9月 【芸北みどりの広場】（焚き付けの材料集め） 9月、10月 【学校校庭】（2回目火を焚く活動・3回目火を使って調理） 11月 【芸北みどりの広場】（自然と山の匠への感謝の会） 参加者：3年生9名・4年生12名・引率教職員4名 （各回に山の匠4名および保護者サポーター8名程度）</p> <p>⑤「せどやま教室」 日時・場所：5月【せどやま市場】（木のエネルギーや「せどやま市場」の木の活用を知る） 6月、10月、11月【芸北オークガーデン奥山】（コナラの切出し1～3回） 12月【学校】（切り出しで得た地域通貨使った感謝の会） 参加者：5年生11名・6年生16名・引率教職員4名 （各回に山の匠6名および保護者サポーター9名程度）</p>		

「雲月山山焼き」



防火帯を作る作業を手伝い、山焼き見学後、炎の下でも植物の生きている根を観察しました。

「山のめぐみ」



山の匠から、人工林と天然林の違いや木の名前などを教えてもらいました。

「希少生物観察」



湿地に行き、希少な「イワミサンショウウオ」^{ラン}の卵を見つけます。児童はこの卵を孵化させ、イワミサンショウウオを自然に返す活動を行い生態系や豊かな芸北の自然を守る意識を高めました。

「せどやま教室」



切り倒されたコナラを規格の長さに切り出し、「せどやま市場」で買い取ってもらいます。地域通貨を自分たちの手で稼ぎ、地域の経済の活性化に貢献するとともに、山の自然・山仕事の文化などを山の匠から学びました。

◆実施に伴う効果

- ・「ふるさと芸北」の希少な生物にふれる活動や自然と共に息づいてきた地域の文化を体験する活動を通して、地域の良さを実感したり人との関りをもったりして、地域への愛着を深めることができた。
- ・「せどやま教室」「山のめぐみ」の活動を通して、課題解決力、友達と協働する力、失敗してもやり通す意志力、また頑張ろうとする自己回復力、やり切った後の自己肯定感などの資質・能力を高めることができています。
- ・「えがく」「やってみる」「ふりかえる」の学びのサイクルで繰り返し行う活動を仕組むことで、児童が目標をもって活動し、失敗を次の成功の糧として、意欲的に取り組む力をつけている。
- ・「せどやま教室」は、コナラの木を切り出し、地域の販売所（せどやま市場）に薪の材として購入してもらうことで、地域経済の仕組みを学ぶと共に、地域を活性化するための地域の「宝」を活用する意識を持たせることができています。

◆苦労した点

- ・「山の匠」の皆さんとの活動内容や日程の調整
(ねらいに迫るために活動内容を「山の匠」と確認しあうこと。早めに活動計画をたて調整すること。)
- ・野外での活動であるため、雨天の場合の予備日の確保と実施・中止の判断
- ・広範囲の地域で出かけての活動であるため、児童移送用の貸し切りバス代の確保
- ・危険を伴う活動もあるため、安全への準備や配慮および児童への安全指導

◆今後の課題・発展の方向性

【課題】

- ・「山の匠」の皆さんの高齢化により活動が負担になっておられる方もある。次の世代の「匠」を引き継いでくださる方をお願いしていくことが必要である。

【発展の方向性】

- ・「せどやま教室」と同じ目的で芸北の中学生がおこなっている「茅金市場」の活動へ、児童の思いをつなぐ。
- ・地域の活性化を目指し、経済活動に乗せることができる芸北の自然を生かした新たな「宝」を探す。

◆活動を終えての感想・意見等

- ・マツダ財団からの地域活動支援をいただいたことをきっかけにして、「芸小と山の匠たち」の活動を、広く発信することができて、よかった。
- ・「山の匠」の皆さんや地域の方々にとっても、今回の支援をいただいたことは、「芸小と山の匠たち」の活動が意義ある地域活動として認めていただけたという自信になった。

活動名	No.11	団体名	矢野の家
子どもから高齢者まで誰もが来られる 地域の居場所づくり		活動拠点	広島県広島市安芸区
		代表者	上 郁子
		支援金額	35万円
活動概要			
<p>① 民家を開放したオープンスペース（週2回木・金 10時～16時）月平均延べ約350名</p> <p>② 多世代交流（食育・季節）行事を開催 目的：多世代交流を行うことで相乗効果を生み出し地域の活性化を目指す ・こどもシェフ食堂（4月3日）※参加29名 ・ママ楽ランチ会（7月12日）※参加11名 ・夏まつり（7月26日）※参加約60名 ・中高生の座談会（8月9日）※参加6名 ・お月見会（9月12日）※参加20名 ・ハロウィンウォークラリー（10月18日）※参加52名 ・芋ほり体験（11月8日）※参加6組 ・おとな食堂（11月8日）※参加7名 ・秋祭り（11月17日）※参加約110名 ・クリスマス会（12月20日）※参加76名 ・お餅つき（12月26日）※参加11名 ・おとな食堂（2月14日）※参加11名</p> <p>③ 地域・子ども食堂（月2回第1・3金曜日 16時～19時）※参加各回30～50名程度/1回 目的：食を通じた居場所づくりを行うことで顔のわかる地域づくりを行う</p> <p>④ ・無料学習支援やのジューク（月1回）※参加各回10名程度/1回 目的：学習を定着させ達成感から自信に繋げる。経済的理由に関わらず意欲ある子ども達の学習を応援する ・やの食堂での無料学習支援（月2回）※参加各回10～20名程度</p> <p>⑤ お泊り会（7月26日・27日）※参加15名 目的：共同生活において仲間意識や協調性を養う</p> <p>⑥ 他の子ども食堂に参加（8月22日）※10名 江田島体験（8月16日）※悪天候の為中止 目的：公共交通機関を利用しマナーや社会的ルールを学び、他の地域の子どものと交流することで視野を広げる</p>			



地域・子ども食堂(クリスマス会)



やのジューク(中学生対象)



地域の方の指導で子ども達と野菜の苗植え



子どもクッキング(お弁当作り)

◆実施に伴う効果

- ①多世代交流を軸とした活動により、行政関係等からの視察を受け、多世代の住民を主体とした地域づくりのモデルケースとなり他の地域でも活動が生まれ始めている。
- ・広島県社協プラチナ大学三原校受講者受け入れ（12名）・広島市東区地域支え合い課見学
 - ・フォーラムでの事例発表・船越、瀬野包括地域デビュー受講者・焼山民生児童委員見学者受け入れ
 - ・安芸地区医師会「地域の支え合い活動」事例発表・令和2年度からの第6次広島市基本構想基本計画安芸区アクションプラン作成にあたり運営委員として活動し、矢野の家の活動がモデルとなり掲載される・広島市社協「居場所づくり」事例発表にて大学生2名が自身の経験を踏まえて発表。共感を得て青少年の活動が評価された。
- ②やのジユクを通して集まった子ども達が学習だけでなく、地域活動へ興味をもち参加するようになった。高校生、大学生は青少年のリーダー的存在となり青年部（中・高・大学生）が発足し、子ども達の斜めの関係として活躍している。青少年自らも新たなプロジェクトを企画し歩き始めている。
- ③地域・こども食堂を継続して開催することで課題を抱える子ども達の姿や背景を知ることができ、良い事も悪いことも一緒に考えられる関係になった。また子ども達は見守りの目があることで安心して過ごすことができ、自己肯定感を育み自分を表現することが出来るようになった。そして子どもから、参観日や発表会等に来てほしいと案内が届くようになり、地域のお母さんとしての役割も出てきた。また、スタッフやなじみのボランティアさんと子ども達の信頼関係も深まってきている。保護者との関わりが出来始め、子どもの抱える問題等を一緒に考える機会もできている。

◆苦労した点

- ・子ども達が地域で起こした問題に対し、学校や保護者との連携がまだスムーズにはいかず、あいまいなままになり、子ども達に解決していくすべを身に付けさせていくことが十分でない。
- ・行政からの問い合わせや見学、事例発表への参加依頼等は沢山あるものの、一市民活動としての位置づけのみであり、その対応に費やした時間と労力に対してボランティアである。行政からも必要とはされ、モデルケースになることは嬉しいことではあるが、行政からの助成には結びつかない現状である。
- ・自主運営を目指してはいるものの、人と人との繋がり合い、支え合いをどういう形で収入に結びつけるか難しさを感じている。

◆今後の課題・発展の方向性

- ・継続して活動していくためには資金確保が必要。助成金は必要であるが、SNSを利用して活動を幅広く知ってもらうことで理解者を増やし、自主運営に向けて体質改善を行う。ボランティア＝無料奉仕という概念を払拭し、有償ボランティアとしての一面をもち活動継続を目指す。
- ・スタッフのスキルを活かした地域活動として、地域の支え合いステーションを展開し自主運営を目指す。
- ・活動を通じて発足した青年部を充実させ、若者が自ら作り上げていく活動や自己実現を応援する。視野を広げるため、自然体験活動や講師を交えての社会体験活動も企画していく。さらに、地域の方々と力を合わせて梅畑の一面に『みんながつるげる広場』をつくるプロジェクトを予定している。地域活動を通して出会った青少年が支えられる側から支える側の支援者となり、共に活動していくことを楽しみにしている。

◆活動を終えての感想・意見等

今年度は新たに若者たちが集い矢野の家青年部という頼もしい部が生まれました。学習支援ややの食堂を通じて出会い、地域活動に繋がっています。彼らから見える子どもの問題点・関わりでの葛藤に対し、共に問題解決に向けて話をしています。彼ら自身が矢野の家で出来ることを見つけ、今まさに歩き始めようとしているところです。世代を超えたつながりは縦割りでも横割りでもなく、斜めの関係で生まれています。この活動を支えてくださったマツダ財団様に大変感謝しております。今後も地域で生まれる世代を超えたつながり合いや青少年の育成活動の応援をよろしくお願いいたします。

活動名	No.12	団体名	フリースクール おくはた分校
フリースクール おくはた分校		活動拠点	広島県広島市安佐南区
		代表者	粟村 よう子
		支援金額	22万円
活動概要	<p>(月・水・金曜日) : you-縁にてピアリーダーの方々との交流、畑作り、陶芸等の講座への参加、パソコン、手芸の作品作り、イベント参加なども行う。</p> <p>(火曜日) : おくはた集会所内にて、調理実習。毎日の生活に役立てる。</p> <p>(木曜日) : 主に校外学習。遊びを通じて様々な場所へ出かけ、人との交流や新しい挑戦をしていく。</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 時折イベントが開催され、お花見、海の家、魚釣り、国際交流なども参加。 ・ 卵からひよこを孵して育てる経験を通して命の大切さを学び、世話をして育成することで責任感を学び、卵をいただくことで食の有難みを知る。 ・ 仕事への参加、労働から協調性を学び、社会の仕組みやルール、他人に必要としてもらえることや社会参加への喜びを知る。 <p>毎日の規則正しい生活リズムと環境から健康的な生活を送れるようになる。 自分たちが普段口にするものは何なのか、健康とは何なのか、普段の生活を通して振り返り考える力を身に付ける。</p> <p>参加人数 : 6人～ イベントや行事参加は人数が増え、最大で50人程度。</p>		



フリースクール おくはた分校
(昭和47年まで小学校として使われていました)



フランス人ボランティアと一緒に英語のレッスンの風景(^^)
緊張でドキドキ!! 初めてのレッスンです



英語の授業用に作成してくれました(#^.^#)



ピアリーダーとのゲーム大会は大盛況♪



動物に触れる機会もありませんでしたが、鶏を捕まえるのもお手の物になりました(/・ω・)/



水に浸かるのものも嫌がっていましたが、この後、川に入り泳ぐことが出来ました(#^.^#)

◆実施に伴う効果

- ・学校へ行けない、行かない子供たちが自分の居場所としてフリースクールに通うことが出来るようになった。
- ・自分から人に関わることが出来るようになってきている。
- ・自分のやりたいこと、やってみたいこと等を伝えることが出来るようになった。
また、やってみようという意欲が見られるようになった。
- ・失敗しても諦めないで続けようとする姿が見られる。
- ・料理が出来るようになり、自宅でも活躍中。
- ・怖がらず水に入れ、川遊びが出来るようになった。
- ・スポーツ、音楽にも触れ豊かな感性をはぐくんでいる。

◆苦労した点

- ・過去のつらい出来事から人を信じられなくなり、関りを拒否する子供たちと信頼関係を育むということ。
- ・否定的になり前向きに物事を考えられない子供たちの興味、関心を見つけ引き出すこと。
- ・「生きることは楽しいこと」と言う意識のもと、自由な発想で子供たちがやりたいことを見つけること。

◆今後の課題・発展の方向性

- ・世の中は広い、たくさんの可能性があることを知ってもらう。
- ・つらい経験を活かし、他人の苦しみや気持ちが理解できる思いやりの心を育てる。
- ・信頼できる人もいることを知り、信頼から良い関係が築けることを学び構築する。
- ・学校へ行かなくても基本的な学力が身に付けられるように支援が必要。
- ・同年代の子供たちとのコミュニケーションやルールを学ぶ。
- ・子供の意思を十分尊重して支援が行われるよう配慮すること。
- ・自分が好き、自分ってすごい、自分も大切な人など、引き続き自尊感情（自己肯定感）を育てていく。

◆活動を終えての感想・意見等

活動初めの子供たちは、他人を信じず頼る・甘えるということが出来なかった。

しかし、少しずつ心を開いてくれるようになり、笑顔も出てくるようになった。

今までは新しいことに挑戦することや、外に出かけることに対して不安が強かったが、遊びを通じて世界が広く明るいものに変化していった。

学校へ行けない・行かないなら、学校に行っていたら出来ない経験をし、与えられたものではなく自分で考え自分で選び、人生を進んでいけるようになっていって欲しい。

活動名	No.13	団体名	ロボカップジュニアジャパン 広島ブロック運営委員会
自律型ロボット競技大会の開催とこれを通じた 次世代ボランティア人材の育成	活動拠点	代表者	広島県広島市安佐北区 山野 真一
	支援金額		12万円

活動概要

■活動期間：

2018年9月（企画活動開始）～2019年6月9日（大会実施）

■対象：

全国の散らばるロボカップジュニア*¹のOBである学生で、「せとうちオープン」の運営活動を引き継ぐ意思を持つ以下の学生たち。（全国大会常連でする学生たち）

リーダー：Masaokaさん（香川出身 京都在住 専門学校生 世界大会出場経験多数）

メンバー：Hiraiさん（香川出身 長岡在住 大学生 世界大会出場経験多数）

Koresawaさん（福岡出身 沖縄在住 大学生 世界大会出場経験多数）

Kushidaさん（奈良出身 奈良在住 大学院生 D2 世界大会出場経験あり）

Yamanoさん（広島出身 徳島在住 大学院生 M1 日本大会出場多数）

SNS上で上記以外のメンバーも数名が部分的に参画しているとのこと。

※競技の継続・発展に向けて地方で技術展開のプレゼンテーションの場を持つなど、技術とボランティア精神を併せ持つ。



7年前、全国大会の懇親会での写真

■活動開始の経緯と目的：

ロボカップジュニアのOBとなった学生たちからローカル大会である「せとうちオープン*²」の運営を引き継ぎたいとの申し出があった。ボランティア活動の継続に向け次世代の担い手を憂慮する中、「活動を通して共に育った学生たち」の自発的に引き継ぐ意思に対し、企画・運営のスキルを身につける機会として「大人は支援する」事とした。

* 1. ロボカップジュニア：

「2050年にサッカーの世界カップ優勝チームにヒト型の自立ロボットで勝つ」という目標を掲げる「国際プロジェクト」の人材育成に向けて設けられた世界規模の自律型ロボットの競技大会。

* 2. せとうちオープン：

「全国に行けなかった子達」にも交流の場を設けるため近隣のブロックに声をかけて福山で2012年に開始した。「交流出来て楽しい」と全国で有名なローカル大会となっている。

■活動内容：

・2018年9月： SNS上でメンバーを招集し内容の検討を開始（Slackを用いて情報のシェアを開始）

・2018年12月： 時期&場所を決定（全員による協議）

場所＝今まで活用していたエフピコRimの閉鎖もあり、無料で借りれるCLiP HIROSHIMAに決定

時期＝学生が動きやすく、7月末の世界大会に向けて「世界大会出場選手を呼びやすい時期」として6月8-9日とした。

→CLiP HIROSHIMAの要望として、「初めて見る子も何か体験できる場を設けてほしい」との要望あり、検討を開始。

・2019年1月： 内容を決定（体験会の併催と、大型モニターを用いたパブリックビューイング設定）し、手配を開始

機材調達＝全国大会で使用する競技フィールドを借りる交渉・調整をダイセン電子工業と行い、送料のみで貸与頂く事となった。

広報ポスター作成＝ロボカップジュニア福山ノード長（三原でデザインスタジオを経営）に概要を伝えてデザインを依頼

・2019年4月20日： 現地（CLiP HIROSHIMA）での打ち合わせ（リーダー）

現地で設備責任者との打ち合わせを実施。設備責任者よりプレスリリース活用の提案あり、文面をリーダーが作成の上

CLiP HIROSHIMAよりメディアに送付頂いた。（後日、RCC中国放送より打診あり、ラジオ取材を受ける事となった。）

・2019年4月27日： ロボカップジュニアジャパン日本大会での広報活動を実施

大会の運営サイトに許可を取り、会場でのポスター掲示を行った。また、同時にWeb上でのエントリーを開始。

・2019年5月： 電子得点板システムの構築（リーダー&メンバーで分業）

・2019年6月7日： 機材到着&設営（一部メンバー+大人スタッフ）

・2019年6月8日～9日： 大会開催（全員）

参加人数： 競技へのエントリー人数＝23名（その保護者＝50名以上） ボランティアスタッフ＝9名（広島、愛媛、福岡）

◆実施に伴う効果 学生スタッフが以下の「苦勞」をすることで成長のキッカケとなった：

①身に染みた「段取りの大事さ」

競技スタッフをする事に慣れている事から、「なんとかなる」という意識あり。「現場合わせ」が頻発し、他のスタッフがついて来れない事が多発した。「企画・段取り段階」を初めて携わったことで「準備の大切さ」が身に染み込んだ模様。

②「対象を把握する難しさ」を知った

機材や場所について意識が集中する傾向にあった。（確かに機材は日本大会よりも立派となった）
対象は「出場する選手たち」で、特に意識すべきは小中学生だが、開催時期が運動会シーズンに重なっていたり、懇親会でなかなか話を出来ない子の扱いに困ったり、苦勞し反省する中で視点を変える必要性を学んでいた。

（特に開催時期については改善要。例年は参加者が40名以上になるが、今回は23名に留まった。）

③大人・企業相手の交渉による「場慣れ」

場所の調整・打ち合わせや、企業からの協力を引き出すなど、こういった企画・運営をしないとできない経験によりコミュニケーションの経験値が上がった。（彼らはロボット開発のためにスポンサー集めの経験を持つが、大会運営は初めて）

◆今後の課題・発展の方向性

今後の課題： 参加者である小中学生を配慮した日程と、コミュニケーションをとる仕組み創りが課題となる。

学生たちは既に今後の継続的な活動にすべく「振り返り活動」を開始しています。

（次年度の開催時期を9月に設定し、場所の確保を済ませて準備を開始しています。）

◆活動を終えての感想・意見等

学生スタッフの熱意には感動しました。彼らの「繋がねば」という意識を伸ばしてやることで、社会貢献意識の醸成と共に、後に続く子達に「なりたい姿」をイメージさせてあげること繋がると考えています。

一方で、彼らの周囲の大人や企業に支援の輪が出来てきて、佳いコミュニティ創りが出来ればと期待が膨らみます。



活動名	No.14	団体名	広島市防災士ネットワーク
地域を愛する青少年の養成を実現する防災士 による地域防災活動		活動拠点	広島県広島市安佐北区
		代表者	柳迫 長三
		支援金額	32万円
活動概要	<p>① 定例研修会（月に1回…年に12回） 会員の防災士を対象にした防災研修</p> <p>② 市民防災講座</p> <ul style="list-style-type: none"> ●市民を対象にした、防災に関する新しい情報提供…2019年は5回開催 平均20名参加 <p>③ 地区防災イベントへの参加…学校・公民館での防災フェア、防災訓練</p> <ul style="list-style-type: none"> ●学区単位で開催される防災イベント等に、会員防災士が5名程度参加…年間約20回 ●小学生防災活動のサポート「落合っ子防災フェスティバル」 <ul style="list-style-type: none"> ・12月20日。安佐北区落合小学校6年生（3組120名）の取組みを支援 →21のグループを作り、グループ単位にテーマを設定して取組み、成果を発表 ●防災活動スタンプラリー「鯉こいキャラバン」 <ul style="list-style-type: none"> ・7月27日（土）高陽絆まつり 200名参加 ・11月10日（日）大林学区防災フェア 150名 ・11月24日（日）広島都市学園大学 100名参加 →約10種の防災活動に参加することで得られるポイントを活用するスタンプラリー ●「広島市防災まちづくり事業」…防災まち歩き、防災マップ作成、DIG訓練など <p>④ 広島市災害ボランティア連絡調整会議、「太田川水防災タイムライン」検討会への参加 【公式ホームページの作成】</p> <p>当会概要と実施活動の記録、会員間の情報共有、活動参加者への情報提供と情報共有、活動のアウトプットである防災マップの有効活用などを目的にホームページを作成中で、現在、最終段階です。</p>		



落合っ子防災フェスティバル①



落合っ子防災フェスティバル②



鯉こいキャラバン①



鯉こいキャラバン②

◆実施に伴う効果

防災力強化のためには、地域住民、所在する事業所、地域に関わる団体・教育機関などが連携して取り組み強化を図ることが不可欠である。まずは、地域を大切にする意識をもつ住民・関係者を増やすことが大切である。そのなかでも、青少年層、特に小学生への防災意識醸成と、小学生による防災活動への参加も重要である。今年度、広島市防災士ネットワークでは、新たに、小学生を対象にした防災プログラムを実践した。

① 小学生「防災フェスティバル」活動

② 「鯉々キャラバン」プログラム

いずれも、広島の地域性も加味したプログラムで、参加した小学生は楽しく防災活動に参加し、結果として防災意識・地域の郷土愛の醸成につながったと考えている。小学生を通して、親御さんの防災意識の向上や、取組みに参加した大学生の防災意識・コミュニティ意識の向上も図れたと考えている。

参加した小学生からは、「やってみれば面白い」との声もあり、活動を指導する防災士メンバーのやりがいの向上にもつながっている。作成中のホームページでも活動の内容を掲載予定である。

◆苦労した点

防災活動は総論では賛成を得られやすいが、具体段階になると自主的な実践に二の足を踏む団体・法人が少ない。今回の活動でも、実施主体である小学校、地域PTA、商業施設などの事前調整には時間と労力を必要とした。特に、決定権がある学校管理者層との協調体制の構築に時間を要した。

また、プログラムで活用する備品類の確保にも苦労した。最終的には、今回いただいた助成も含めて、関連するPTA、行政等の協力を得て、プログラムに必要となる備品類の調達を完了することができた。

「鯉こいキャラバン」に関しては、カーブの鯉をシンボルにした広島版（元は「カエルキャラバン」）にすること、広島の人材だけで運営することなど、プログラム発売元との利活用に関する調整と契約関係に苦労した。

また、ここ数年で苦労している点に活動参加者の高齢化がある。防災士の性質上、地域自治会・町内会の役員層が多いが、所属メンバーの努力により、徐々にではあるが、若年層、女性の参加が増えつつある。

防災分野でも新しい技術を活用したツールができてはいるが、対応できる会員は少なく、利活用にも苦労している。

◆今後の課題・発展の方向性

「鯉々キャラバン」・「小学生防災フェスタ」をさらに広い対象へ拡大することを検討中である。個別の学校単位にプログラムの概要と効果を継続的に案内するとともに、行政との連携を強化することで、新年度はプログラムを採用する学校・団体を増やす予定である。

一方、損害保険協会が事業として展開している「防災探検隊」の連携強化を推進中である。小中学生が、学校周辺の街歩きを実施し、危険個所、安全個所、町の歴史などをマップとして作成し、全国コンクールに応募するものである。今年度は、損害保険協会中国支部事務局と協働の仕組みを構築したが、残念ながら応募には至らなかった。新年度は、広島地区で2～3校の応募を実現したい。

会員間の情報共有、研修教材の共有等も目的にホームページを作成したが、効果的な活用のためには会員のインターネットに関する基本的な理解力の向上が必要であり、今後この分野での研修にも注力する。

◆活動を終えての感想・意見等

青少年は、当初は面倒憂さそうにしているが、丁寧に説明して一緒に活動すると、自主的に取り組むことができることを再確認した。また、本格的な防災の話は初めて聞く生徒が多く、素直に聞こうとする姿勢を強く感じた。

素直なだけに、正しい情報の提供の重要性を改めて認識するとともに、地域全体で青少年を育成する仕組みの構築が必要であることを再確認した。防災を切り口に、地域力向上を目指す活動を今後も継続していく。

また、防災活動は地域コミュニティと深く関係しており、民生委員、PTA・子供会、自治会・町内会、地域の事業所など、幅広い団体と連携すると効果的である。今回の青少年健全育成活動を通して連携が始まった団体とも、さらなる連携の強化に努めていきたい。

活動名	No.15	団体名	佐伯文化芸能振興会
輝楽希楽列車（きらきられっしゃ）		活動拠点	広島県広島市佐伯区
		代表者	勇野 公代
		支援金額	30万円

活動概要

1 紙芝居制作

広島市佐伯区河内地区の1999/6/29土砂災害を忘れないためのオリジナル災害紙芝居制作

- ① 内容：郷土歴史家/警察/消防に取材し紙芝居のシナリオ、作画をプロの作家に委託し制作
- ② 規格：A2サイズ、カラー、厚紙裏張り補強、2作品

2 紙芝居シナリオ読み聞かせの開催

(1) 読み聞かせ

- ① 開催時間：2019年7月8日
- ② 開催場所：広島市立河内小学校
- ③ 内容：紙芝居のシナリオを三グループに分けた全校生徒162名に読み聞かせし思い浮かんだ場面を画用紙にその場で描いた

3 絵コンクール審査会

- ① 開催時間：2019年8月20日
- ② 開催場所：広島市立河内小学校
- ③ 内容：各学年優秀絵画を一点、区長、警察署長、消防署長、消防団長、自治会長、校長が選出

4 優秀絵画と作家が選んだ絵画および紙芝居展示会

- ① 開催時間：2019年10月12～16日、10月26～27日、11月3～10日、11月17～12月3日
- ② 開催場所：五日市公民館、河内公民館、佐伯区民文化センター、広島市立河内小学校
- ③ 内容：優秀絵画と作家が選んだ絵画および紙芝居のパネル展示と紙芝居3度上演

5 優秀絵画と作家が選んだ絵コンクール表彰式と児童による紙芝居上演

- ① 開催時間：2019年12月3日
- ② 開催場所：広島市立河内小学校
- ③ 内容：優秀絵画と作家が選んだ絵画を表彰し、練習を重ねた児童による紙芝居の上演（全校児童の前で）

紙芝居シナリオ読み聞かせの開催



絵コンクール審査会



受賞絵画と紙芝居の展示



紙芝居読み手練習



各長と作家が選んだ絵コンクール表彰式



制作した絵本



◆実施に伴う効果

- ① シナリオ作りで消防、警察、郷土研究者等から（1999年の6.29土砂災害）当時の話しや、過去の水害や昔話を知ることによって伝え繋ぐことの重要性に使命感を持って取り組むことが出来ました。
- ② 児童へのシナリオ読み聞かせによって浮かんだシーンをその場で描いてくれた絵コンクール参加者は全クラス162名の参加で137点もの絵画が応募され全校児童を巻き込む一大イベントとなりました。
- ③ 絵コンクール審査会では、地域の長の方々（区長、警察署長、消防署長、消防団長、町内連合会長）の参加をいただき校長先生と供に優秀賞を選出して頂き地域の繋がりがより強固になりました。
- ④ 紙芝居と優秀絵画、紙芝居に採用された絵画展示会では地域の憩いの場所でもある、五日市公民館（当団体による紙芝居上演）約200名、河内公民館で約100名、佐伯区民文化センター（当団体による紙芝居上演）で約500名の地域住民等方々が展示に触れられて豪雨災害へ取組意識を新たにされたと思います。
- ⑤ 絵コンクール表彰式では優秀賞を選出した各長より賞状と記念品が手渡され児童の満面の笑みが印象的でした。児童による紙芝居上演は当会指導による練習を重ねたことで、本番は実に堂々としており、来賓者や保護者を紙芝居に引き込んで防災の必要性を再認識されたと思います。

◆苦勞した点

- ① 土砂災害について聞き取りをするに当たり、どなたに、どこまで尋ねていいかの配慮等に氣遣った点です。
- ② 学校長や関係される先生方に取組事業を理解して頂き、実施価値のあるものだとおっしゃっていただくまでお話しした点です。
- ③ 児童の皆さんにシナリオ読み聞かせで色々なシーンをイメージできる様に普段に比べゆっくり、はっきりを心掛け練習を実施した点です。
- ④ 展示会を4会場で実施し会員の手配やスケジューリング等に苦勞した点です。

◆今後の課題・発展の方向性

- ① 佐伯区以外の地域を含めて小学校と協働して、地域の出来事等を今回と同じ手法で展開するための経費確保のため、公的機関との共催ができるようにしたいです。
- ② 紙芝居公演を充実したものにするため、防犯紙芝居や地域の物語（民話・昔話）も紙芝居化できるようにしたいです。

◆活動を終えての感想・意見等

- ① 児童へのシナリオ読み聞かせと作画は、全クラス162名の参加にも拘らず、137点もの応募があり、それらすべてが一日で終了したことは驚きでした。学校側の協力なくしてあり得ないことと、綿密な打ち合わせの賜物と自信にもつながりました。
- ② この度の事業によってお蔭様で紙芝居上演や、紙芝居指導のお声をかけて頂くようになりました。今後も精進しながら、和気あいあい元気に続けていければと思っています。
- ③ この度は貴財団支援と公的支援に恵まれ、紙芝居、絵本制作と作品展会も実施できました。これほどの充実感をもって完了できたことを心より感謝致します。本当にお世話になり有難うございました。

活動名	No.16	団体名	一般社団法人 クローバーの会
発達障がい児を自分のスペシャリストに！		活動拠点	広島県広島市佐伯区
		代表者	村主 裕子
		支援金額	40万円
活動概要	<p>1、クローバーの広場 (場所) 中区地域福祉センター <国語教室、算数・数学教室> (参加人数) 延べ527人 (実施日) 4/6・7・13・14・27・28 5/5・6・12・19 6/1・2・8・9・23・29・30 7/6・7・13・14・27・28 8/3・4・10・12・18・25 9/7・8・14・22・28・29 10/5・6・12・26・27 11/3・9・10・23・30 12/1・7・8 1/5・11・25・26 2/1・2・22・23・29 3/1・7・8</p> <p><英語教室> (場所) 中区地域福祉センター (参加人数) 延べ48人 (実施日) 4/20 5/18 6/15 7/20 8/17 9/21 10/19 11/16 12/21 1/18 3/21</p> <p><絵画教室> (場所) 中区地域福祉センター (参加人数) 延べ107人 (実施日) 4/20 5/18 6/15 7/20 8/17 9/21 10/19 11/16 12/21 1/18 2/15 3/21</p> <p><体操教室> (場所) 二葉公民館 (参加人数) 延べ98人 (実施日) 4/21 5/19 6/16 7/21 8/18 9/22 10/20 11/17 12/22 1/19 2/16 3/22</p> <p><タブレット学習研修会> (実施日) 1/5 1/12 (場所) 中区地域福祉センター (参加人数) 延べ58人</p> <p>2、親の集い (場所) 中区地域福祉センター (参加人数) 延べ117人 (実施日) 4/20 5/18 6/15 7/20 8/17 9/21 10/19 11/16 12/21 1/18 2/15 3/21</p> <p>3、講演会・研修会</p> <p>①第1期発達障がいの発見とその後の支援に関するキャリア研修会 第1回 5/11 (場所) 南区地域福祉センター (参加人数) 60人 第2回 5/25 (場所) 安芸区地域福祉センター (参加人数) 74人 第3回 5/26 (場所) 安芸区地域福祉センター (参加人数) 78人 第4回 6/23 (場所) 南区地域福祉センター (参加人数) 64人</p> <p>②「子どもの年齢に合わせた子育ての仕方・親の心構え」学習会 (実施日) 7/14 (場所) 中区地域福祉センター (参加人数) 82名</p> <p>③「発達障がい児・者とセクシュアリティ教育」学習会 (実施日) 10/14 (場所) 東区地域福祉センター (参加人数) 91名</p> <p>④第2期発達障がいの発見とその後の支援に関するキャリア研修会 第1回 11/24 (場所) 西区地域福祉センター (参加人数) 65人 第2回 12/14 (場所) 西区地域福祉センター (参加人数) 63人 第3回 12/15 (場所) 中央公民館 (参加人数) 75人 第4回 1/13 (場所) 東区地域福祉センター (参加人数) 65人</p> <p>⑥「子どもの時の支援、大人になる頃からの支援 ～親に出来ること～」学習会 (実施日) 3/29 (場所) 中区地域福祉センター</p>		



4月の絵画教室の様子



幼児対象の国語教室



国語教室子どものノート



算数教室(小高学年)



英語教室(中・高生)



体操教室(小学生以上のサッカー)



タブレット学習対象者研修会



研修を受けタブレットを操作する子ども





第 1 期キャリア研修会演習風景



↑ 親の集いの様子
← 第 2 期キャリア研修会受付風景

「発達障がい児・者とセクシュアリティ教育」学習会

◆実施に伴う効果

- 1、クローバーの広場各教室（発達障がい児への発達・学習支援）の受講者数 49 名⇒76 名に増加。
 - ・多くの子が学校のテストの点を 30 点～50 点アップ。（20～30 点から 100 点になった例も 10 件近くあり）
 - ・多くの子に、集中力アップ、自分から学習に取り組む、自信を持ち始める、書く字がきれいになる等の変化が表れ、自己肯定感が向上⇒保護者が子どもをしっかり褒めるようになった。
 - ・読み・書き障害などの学習障がい児を対象にしたタブレット学習（広島大学氏間准教授とタッグを組んで開始。）
タブレット学習者は、昨年度 11 名 ⇒ 今年度 21 名に増加。（在籍校の授業で活用。）
- 2、親の集い 賛助会員（昨年度 83 名 ⇒ 今年度 123 名）（3 歳の子どもから 40 代の成人を持つ親）
- 3、講演会、研修会（昨年度 550 人台 ⇒ 今年度 900 人台にアップ）
 - ①発達障がいの発見とその後の支援に関するキャリア研修会の参加者 第 1 期・第 2 期とも延べ 270 人前後
目的 啓発と支援者（親・専門家など）のキャリアアップ
要因 助成金で、参加費を格安にし、発達障がいのスペシャリストを講師として、全国から招聘出来た。
参加層 = 医師・大学研究者・教育委員会など行政担当者・保健師・心理士などに拡大
参加地域 = 山口県・岡山県の中国地方、福岡県・佐賀県の九州地方、奈良県の近畿地方に拡大
 - ②「子どもの年齢に合わせた子育ての仕方・親の心構え」学習会
広島県内から、どこにも相談できるところのない、講演会等に参加したことのない保護者が多く参加。
 - ③「発達障がい児・者とセクシュアリティ教育」学習会
助成金で、発達障がいと性的問題に関する専門家を招聘でき、性についての本格的な講演会が初めてできた。
 - ④連携、協力活動
 - ・連携、協力ができた団体（行政・大学などの公共機関、広島市医師会・広島県臨床心理士会・日本学校心理士会広島支部等）に拡大
 - ・広島市子ども療育センターの医師などの紹介で入会するケースがある。
 - ・平成 27 年に呼び掛けた「発達障害の課題に取り組む各分野の専門家による会議」のシンポジストを会員の保護者が担当。
（広島の支援者支援と各分野の連携づくりをする発達障害運動を支えている。）
 - ・広大氏間先生主管の「音声教材の効率的な政策に関する調査研究委員会」に参加。親の会としての認識が高まった。

◆苦労した点

- ・広報、宣伝（チラシを万単位で印刷、公的機関や協力関係の団体へ配布）の作業の人的確保と催し物参加者の確保
- ・クローバーの広場指導担当者の確保（発達障がいに関する専門性が高く、子ども観や発達観、教育観が会の理念に合う人材の確保）
- ・会の運営に関わる人材の育成
- ・資金繰り（赤字を半減することはできたが、まだ 100 万円の赤字・未払金がある。）

◆今後の課題・発展の方向性

- ・理念、ビジョンや基本的な取り組みはできているので、今後はその実現に向けて、行政をはじめ各団体や個人との連携と組織づくり、ネットワークづくりを進めていきたい。
- ・広島の発達障がい児・者に切れ目のない支援を担う人材育成や、ペアレントメンターなど保護者のリーダー格になる人材の育成を進めたい。
- ・全ての発達障がいを持つ子どもたちが、自己の能力を全面的に開花させ、社会的自立を果たし、税金の払える人材になるよう、広場の指導プログラムやスキルの向上を図っていききたい。また、その指導法について、広く情宣し広めていきたい。

◆活動を終えての感想・意見等

- ・今回助成金を頂いたことで、長年の懸案だった全国の高名な講師を呼んでキャリア研修会を開催したり、性教育の講演会を開いたりすることができた。大きな反響と期待が寄せられ元気づけられた。今後も機会を作って実施したいと考えている。
- ・上記の研修会や講演会は、行政や発達障害の取り組みに欠かせない団体の後援を頂き、その反響は大きく、賛助会員も 1.5 倍に増え、会の大きな発展につながったと考えている。
- ・マツダ財団助成金贈呈式や成果報告会等で、各地の様々な取り組みをされている団体や個人と知り合う機会ができ、また、高名な著名人から声をかけていただく機会が持てたことは、視野が広がり良い勉強になった。分野が違っても心に響く取り組みをされている方々との交流は、今後会の運営に様々な形で生かしたいと思っている。

活動名	No.17	団体名	しもJOY
“space to find treasures!” (宝物を見つける場所)		活動拠点	広島県広島市安佐北区
		代表者	長谷川 あや
		支援金額	22万円
活動概要	<p>★2019年6月16日(日) 気分はトム・ソーヤ ツリーハウスへ行こう♪・広島市安佐南区の山の中・小学生(12名)、大学生(5名)、大人(7名) 森の中のツリーハウスでの自然体験。薪割りから火おこし、ピザのトッピング、羽釜での炊飯体験とおむすび作り等々、風を感じ木の葉の緑に包まれての調理&食事。五感をフル活用の貴重な体験となった。</p> <p>★2019年7月31日(水) マツダミュージアムと折り鶴タワー・小学生(10名)、大人(6名) 社会見学を兼ねた初めてのバスツアー。興味津々のマツダ見学、市役所食堂での昼食も社会体験! 折り鶴タワーでは、展望台での眺めを満喫し、祈りを込めて折り鶴も折って投下。こどもたちだけの社会見学は、ワクワク&ドキドキの一日となった。</p> <p>★2019年8月25日(日) 本物のドクターと手術体験!・手打ちうどんを作ろう・高陽公民館・小学生(21名)、幼児(2名)、大人(10名) お仕事体験は、小児科のドクターによる手術体験を実施。本物のメスや、縫合針を使って患者(ヌイグルミ)のお腹を真剣に縫合。お昼は、小麦粉から作る「手打ちうどん」作り。細い麺や太い麺と様々だったが、みんなでワイワイと賑やかに、夏休みの貴重な体験となった。</p> <p>★2019年10月12日(土)島根海洋館アクアス・浜田市世界こども美術館 ※悪天候のため中止</p> <p>★2019年12月14日(土) しもじょう食堂・お餅つきとお正月体験・深川集会所・小学生(20名)、幼児(4名)、大学生(6名)、大人(22名) 午前中、クラフトで作る「しめ飾り」作りにチャレンジ。その後、杵と臼でバタンバタンとお餅つき♪ 2歳の女の子から大学生まで、お餅を丸めたり『鏡餅』を作ったり、『お雑煮』も作って地域の方々も一緒につきたてのお餅を食べた。賑やかで和やかな「食堂の日」となった。</p> <p>★2020年2月15日(土) みそづくり体験と豚汁を作って食べよう!・高陽公民館・小学生(14名)、大学生(3名)、大人(6名) 冬の手仕事『みそづくり』の体験会。茹で大豆を手でつぶすところから始まり、塩糀と混ぜ合わせた。今回は初めて小学生のみの調理体験! 大学生のサポートで豚汁づくりにもチャレンジ! 大人に誘導されない自由な発想の場を実現出来た。</p> <p>一年を通じてこどもたちが、〈自然〉〈社会〉〈職業〉〈伝統〉〈智恵〉を学び、体験することが出来た。</p>		

<p>気分はトム・ソーヤ ツリーハウスへ行こう♪</p>   <p>▲自然の中で存分に五感を使いました。</p>	<p>マツダミュージアムと折り鶴タワー</p>  <p>▲職業に触れる体験。興味のある子ない子いていいなって思いました。</p>  <p>▲こどもの視点はおもしろい!</p>	<p>本物のドクターと手術体験! 手打ちうどんを作ろう・</p>  <p>▲本物の手術道具を使っての体験。</p>  <p>▲うどんを足でこねたり、太く切ったり細く切ったり、自由です。</p>
--	--	--

◆実施に伴う効果

- ・ どもたちだけの活動を行うことで、自主性が育った
- ・ 次に行くことを考えて行動出来るようになった
- ・ 地元大学生のサポートの継続で、どもたちとの信頼関係が築かれ、お互いの成長が見られた
- ・ 今年度は体験範囲を学区外へ広げることにより、社会見学や自然体験をすることが出来、数々の学びや発見があった
- ・ 職業体験をすることにより、将来の進路を考える良い機会となった
- ・ 全ての活動が、五感に訴える実体験となり、豊かな未来を構築する原動力となった

◆苦労した点

- ・ 活動内容によっては人数が集まらないことがあった
- ・ 小学生の低学年の需要が多く、高学年がなかなか集まりにくい傾向があった
- ・ 活動計画では、「おとなもどもと一緒に活動」を目標としていたが、活動していく中で、おとなが一緒だとしてもおとながどもを誘導する傾向があり、活動しにくさを感じた(見守りに徹することが出来ない点が我々の目指すスタンスと違っていた)

◆今後の課題・発展の方向性

おとな目線、おとなの常識など、これまでの経験から判断を下したりすることなく、ども本来の自由な行動や発想を尊重し自由な空間＝秘密基地を作り、どもたちが自ら考えて計画し行動出来る場の提供をする。

おとなは、誘導することなく見守りに徹する。

どもたち一人一人が輝き、豊かな未来を創造出来るような、安心かつ自由な空間を創ることを目指す。

◆活動を終えての感想・意見等

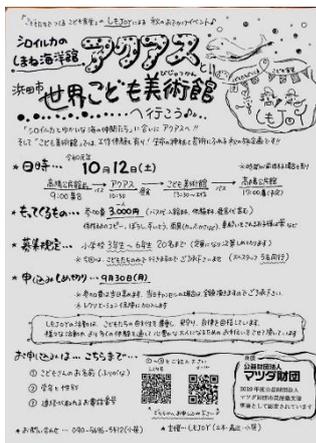
今年度も助成をいただき、どもたちの体験の場を広げることが出来たことに心から感謝申し上げます。

活動を通して、どもたちの本来持っている力に驚かされました。こんなにも自由で柔軟な発想で、自ら問題を解決する力を蓄えているどもたち。我々おとなが思っている以上にどもたちはたくましいです！

そんな生まれつき備わっている力を最大限に発揮出来るような「自由で安全な場」をこれからも提供し、どもたち自ら舵をとる活動に成長していくことを願って止みません。

島根海洋館アクス
浜田市世界ども美術館

※悪天候のため中止



しもじょう食堂
お餅つきとお正月体験



▲やらないときに観察。真剣そのものです。



▲お餅を丸めるのも最初はうまくいきませんでした。

みそづくり体験と豚汁を
作って食べよう！



▲大豆つぶし。どんな風につぶしてもOK！



▲ずーっと、イチゴをカットしてました。

活動名	No.18	団体名	一般社団法人日本発達支援サッカー協会 (JDSFA)
SKC アカデミー ～発達障がいを持つ 児童生徒対象サッカー教室展開事業～		活動拠点	広島県広島市西区
		代表者	杉岡 英明
		支援金額	30万円
活動概要	<p>毎月2回隔週で、広島市高陽体育館にて、約10名の発達障がいを持つ児童生徒を対象に、当協会の有資格者(認定コーチ)の指導による当協会独自のプログラムである「さっかありよういく®」を取り入れたSKC アカデミー(教室)を開催。NHKやTSSなどのメディアに取り上げられた事などによって認知度が高まり、東広島校と田方校を新設し、児童生徒数も20名に増加。県外でも積極的に活動し、山口県発達障害児地域支援体制強化事業として岩国市で「さっかありよういく®」体験会を実施し、大変高い評価をいただいた。「さっかありよういく®」の認知度向上と指導者育成のため、2019年6月、9月、12月に、「さっかありよういく認定講座」を開催し、約50名が参加し、2名の認定講師が誕生した。</p> <p>新たな領域への挑戦として、広島県立広島北特別支援学校の体育授業で「さっかありよういく®」を実施し、特別支援教育での有効性が確認できた。このような、従来の枠組みを超える活動が必要だとの思いから、日本障がい者サッカー連盟(JIFF)の会合でさっかありよういくを紹介し、将来、日本初の発達障がいのサッカー協会としてJIFFに加盟し、より多くの子どもたちを笑顔にしたいとの思いを新たにしました。</p> <p>さらに、活動の幅を広げるため、2019年6月に第1回ジーニアスカップを主催し、SKC アカデミーのサッカーチームであるブルージーニアスが広島県内から参加した発達障がいを持つ児童・生徒の3チームと明るく楽しく交流試合を行った。また、ブルージーニアスは、アンジュビオレ広島とのフレンドリーマッチやフットサル交流会への参加を行った。</p> <p>2019年4月には、社会課題への取り組みが評価され、日本サッカー協会のJFA グラスルーツ推進賛同パートナーに認定された。</p>		



ヒトと関わる事がだんだん上手になっていきます



じっとして話を聞けなかった子どもたちが輪を作って話を聞けるようになりました



指導者育成のため認定講座を開催しました



子どもたちだけでなく保護者の皆さんも笑顔になっていきました。

◆実施に伴う効果

いつもは怒られてばかりの子ども。怒っている母親も自分が嫌いになり、家の中が暗くなる。「さっかありよういく®」の特徴である「褒める」「認める」の結果として、成功体験が積み重なり、自己肯定感が強くなったようで、子どもたちの久しぶりに見る満面の笑顔に、親も、忘れかけていた子育ての喜びを再認識し、「家に帰っても明るい会話が増えた」、「自信がついて難しいことにチャレンジするようになった」、「いろいろなことをやらせてみたが、今までこんなところはなかった。出会えてよかった」という。不登校だった子が春から特別支援学級へいくことが決まったり、通信制高校への進学や、高校普通級進学など、前向きな報告が相次いでいる。SKCアカデミーの開校当初5名だった生徒数は今では20名になり、教室増加の効果もあってさらに増加傾向にある。

◆苦労した点

この活動は単なるサッカー教室ではなく「療育」なのだという本質を理解していただくことが大変難しく時間がかかることであると感じている。それに加えて、広島県や広島市の後援はあるものの、活動自体の認知度がまだ低く、認知度向上のためには、SKCアカデミー開催場所も指導者数も増やしていかなければならないことを実感している。

第1回ジーニアスカップは発達障がいを持つ子どもたちを集めた大会としてはおそらく日本初であるが、その為に何もかもが始めてであったため大変苦労した。幸い、アカデミーの活動にボランティアで参加してくれている修道大学サッカー部と修大本部の多大なるご理解によって、修大体育館を利用できることになったことを含め、修大サッカー部の全面的協力がなければ成功はあり得なかった。参加チーム数4は少ないが、発達障がいを持つ子どもたちは多人数と集団行動に困難を抱えており、第1回としては適当であったのではないかと考えている。勝ち負けへのこだわりが強すぎて、負けると立ち直れない特性がある子どももいるため、勝ち負けに関係なく、「最も素晴らしいスポーツマンシップを発揮したチーム」を投票で選出し、表彰することにした。また、咲いた（最多）賞、あったかチーム賞、ニコニコいっぱい賞、パワフル元気賞と、複数の賞を設けてすべてのチームが受賞できる仕組みにした。

◆今後の課題・発展の方向性

SKC アカデミー会場の確保と指導者の育成、「さっかありよういく®」の更なる周知である。

会場である体育館の確保は、スポーツセンターや公民館、あるいは企業や学校の体育館であるが、殆どの場所で既存団体の使用が決まってい入る隙間がないのが現状。遊休倉庫の改装、またはフットサル場の新設で、自前の施設を持つことが理想であるが、今のところハードルは大変に高い。

指導者育成に関しては、サッカー選手のセカンドキャリア、特に、女子サッカー選手のセカンドキャリアとして候補者を募ることを考えている。現在、元アンジュビオレ広島の選手が、チーフコーチを目指してトレーニング中。将来、特別支援などに関わりたい教師希望の学生や、60歳定年後のライフワークとして指導者の道も考えられる。鹿児島、福岡、岡山、東京、新潟など、他地域から問い合わせがあることは、発達障がいを持つ子どもたちやその保護者、関係者にニーズがあるということだと思われる。それに応えるためにも、指導者の育成は必須である。

2020年4月より、不登校、引きこもりに対する「さっかありよういく®」導入を企画中である。学校に行けなくても、「さっかありよういく®」で自信が付き、チャレンジする意欲を引き出されたことで、自分らしい生き方を見つけるきっかけになって欲しいと思う。日本の教育現場における大きな問題である、不登校、引きこもりにスポーツが関われるということを周知していきたい。

◆活動を終えての感想・意見等

全国の小中学生の約6%に発達障がいの可能性があり、その5割近くが成人になるまでにうつ病を経験、また、7割にいじめにあった経験があり、3割に不登校、引きこもりの経験があるという。日本の未来を支える子どもたちの現状に対して何らかの支援をすることは大人の責任であると考えている。これまでの経験や研究からも、「さっかありよういく®」が子どもたちの自立の助けとなることがわかってきた。これを単なる単発イベントではなく、未就学、U-12、U-15、U-18、そして就労に至るまで継続的に関われ、サッカーを通じての仲間づくりができる居場所としてSKCアカデミーが存在することは、不登校、引きこもり、うつその他の二次的精神障害の予防にもなりえる。

サッカーを通じて、発達障がいの社会的認知や理解を広げ、障がいを個性に変えることができると信じている。

活動名	No.19	団体名	絵本たねまき塾
絵本と紙芝居のコラボで感性の種まき		活動拠点	広島県広島市中区
		代表者	大平 秀雄
		支援金額	18万円
活動概要			
<p>実施日…2019年 4月14日(日)・28日(日) 5月12日(日)・26日(日) 6月23日(日) 7月28日(日) 8月25日(日) 9月8日(日)・22日(日) 10月13日(日)27日(日) 11月10日(日) 12月8日(日)22日(日) 2020年 1月26日(日) 合計15回実施する。</p>			
<p>活動場所…広島市中央公園しばふ広場(西側一画)</p>			
<p>活動内容…毎月第2・第4日曜日の午前10時～午後3時頃まで中央公園西側芝生広場の一画にメッシュのテントを張って「小さな劇場」を設置します。同じ時間帯に「もともち自遊ひろば」が実施されているので乳幼児連れの親子や小学生が100人以上訪れます。「小さな劇場」に訪れた子どもや保護者を案内して絵本の読み聞かせをしたり紙芝居を演じたりします。絵本を通して子どもや保護者に絵本の魅力や豊かな感性を育むことの大切さを伝え、また紙芝居文化に触れながら生身の人間が語る語りの楽しさを味わうと同時に想像力を膨らませたり豊かな言葉に出合ったりすることで人間的な心の成長を養う活動です。</p>			
<p>参加人数…大人 延べ500人以上 子ども(乳幼児から小学生) 延べ500以上</p>			



◆実施に伴う効果

- 上質な絵本に触れる機会があまりなかった親子や大人が、不思議ですばらしい絵本の世界に触れることを通じて交流を深め、絵本との出会いで心を揺さぶる場面をたくさん目にすることができた。
- 自分で絵本を読んで感じる感じ方と、人に読んでもらう読み聞かせで感じる感じ方は、受けとる印象や感じ方、味わい方に違いが生じる体験をすることで、絵本の世界の楽しさを促すことができた。
- 絵本の読み聞かせの大切さや役割について認識を新たにされた親が、我が子に今夜から読み聞かせをしようという意欲を促すことができたように思う。
- 私からの絵本の読み聞かせ指導を受けて、その場で父親が我が子に読み聞かせをしたら子どもが喜んでいる姿をみて、家庭でもっと絵本を通して子どもとの向きあい方が大切だと認識を改めていた。
- 親も子ども紙芝居の楽しさを味わい、バーチャルにはない、アナログ表現のおもしろさを伝えることができた。
- 紙芝居上演で子どもを一か所に集めた後に、絵本の読み聞かせをしたり、歌を歌ったりすることで、絵本や紙芝居の世界をより広く、より深く、より楽しく、より面白くして、お互いに幸せな時間を過ごすことができた。

◆苦労した点

- 「もとまち自遊ひろば」の会が主催の場所に、併設して「絵本と紙芝居広場」を設営して、絵本文化と紙芝居文化を発信したところ、当初は、遊びに夢中になっている親子にとっては関心が低く、呼びかけても集まらなかったが、拍子木を打ち鳴らしながら、遊んでいる親子に紙芝居の上演を知らせると、たくさん集まるようになってきた。
- 紙芝居の後に引き続き絵本の読み聞かせをしたところ、絵本に関心が向かず、元の遊び場にかえって行く子どもが多くいて、引き留めるのに苦労した。
- 夏の暑い時期、冬の寒い時期には、参加者が少なかった。
- アウトドアは開放的で気持ちが良いが、絵本や紙芝居にとっては周りが広すぎて集中を欠くような気がした。やはりインドアで楽しむものなので、少し無理があったような気がする。
- 当日の空模様が心配だった。アウトドアなので天候によって開催が左右されるので朝曇っていて途中で雨が降り出した時には、片付けるのに苦労した。（紙が雨に濡れないように配慮するのが一苦労だった。）

◆今後の課題・発展の方向性

- 幟、テント、紙芝居の舞台、絵本を展示するラック等を購入し、それらを今後も生かし続けたいので、来年度も「もとまち自遊ひろば」の会と一緒に今年と同じ内容で継続していく予定。
- 読み聞かせに興味や関心がある方を集め、読み聞かせのスキルを指導した後、この場所で不特定の人を対象に読み聞かせ活動を行い、自信がついたら、地域の幼稚園、保育園、小学校等にデビューしてもらう。
- 活動場所を、公民館、児童館、放課後児童クラブ等へ広げて、もっともっと絵本文化と紙芝居文化をより広く、より深く、より楽しく、より面白く広げながら、子どもたちの感性を豊かにしていく活動を目指したい。
- この場所が近い将来、サッカー競技場になる予定なので、同じような活動を継続できるのか心配をしている。3月、4月は「はなのわ」のイベントやストリートパフォーマンスの会場や競技場の測量等で使用できないので、活動場所を心配している。

◆活動を終えての感想・意見等

- 活動費をご支援頂いたおかげで、活動に余裕と広がり、深さが生じ、0歳児から高齢者まで幅広い方を対象に、絵本文化と紙芝居文化を発信することができました。本当にありがとうございました。
- 多くの方と知り合うと同時に絵本の不思議さ、すばらしさを共感し、共に楽しい時間を過ごすことができました。
- 読み聞かせで子どもたちの感性を豊かにしていくと同時に、もっと大切なことは、子どもを育てている保護者へのアプローチを繰り返して、保護者がスマホやテレビ等の電子メディアで子育てすることの弊害に気づき、絵本で子育てをすることの大切さ、すばらしさを再認識するよう伝え方をもっともっと工夫することの必要性を感じました。

活動名	No.20	団体名	ピアサポート子育て相談センター
子どもたちに夢と希望を！プロジェクト		活動拠点	広島県広島市中区
		代表者	池永 加寿子
		支援金額	35万円

活動概要

1. 夏休み・冬休み 特別企画

お父さんと一緒にお弁当作り

会場：広島市吉島福祉センター
参加人数：4家族（10名）
ご協力：かるがもキッチンスタジオ

6/30

ひとり親優先。
簡単でも手を抜かないお弁当作り。

お父さん奮闘中 >>



夏休み工作と子育て座談会

会場：広島市吉島福祉センター
参加人数：6家族（21名）
ご協力：安田女子短期大学保育科

7/21

教授を囲んで子育て座談会。子どもは、学生と工作。

座談会の様子 >>



夏休み VR 体験

会場：広島市立大学
参加人数：15家族（49名）
共催：広島市立大学

8/25

教授による家族向け VR 講義のあと、2種類の体験。

VR 体験中 >>



虐待防止講演「子どもたちの笑顔のためにできること」

会場：合人社ウェンティひと・まちプラザ
参加人数：60名
講師：一般財団法人児童虐待防止機構オレンジ CAPO
理事長 島田妙子氏

9/21

虐待のニュースが流れた後では遅すぎる！子どもを守ることを地域で真剣に取り組む、一人ひとりに何ができるのかを考える講演会を開催。

乳幼児同伴、出入り自由とした会場 >>



冬休みクリスマスケーキ作り

会場：広島市吉島福祉センター
参加人数：15家族（44名）

12/22

子どもたちの夢を応援、パティシエ気分で作る。

できたよ～！ >>



2. 中学生の学習・ピアサポート（個別相談）

会場：広島市吉島福祉センター / ピアサポート子育て相談センター
実施日：毎週日曜日（イベント実施の場合、土曜日変更あり）時間：60分 / 75分 / 90分（個人の内容、体調により変更）
参加人数：12名

親への報告書（月ごと） >>

親でもなく先生でもない第三者のサポート。生きることが辛かった体験をもとに、学校に行けない子どもと本音で向き合う作業です。「生きていく力」を理解、訓練するため、認知行動療法をレモンとレモンケーキ、受け止め方の違い（友人とのトラブル）を赤い箱と黒い箱で説明しています。親へ各回のピアサポート内容は報告しますが、子どもが話したことは伝えないということで子どもとの信頼を築いています。（ピアサポート中は、撮影をしておりません。）

辛いことがあっても必ず乗り越えていける！あきらめなければ。



3. 養育者のピアサポート（個別相談）

会場：広島市吉島福祉センター / ピアサポート子育て相談センター / Line
実施日：毎週土曜日 要望により平日 17:30 以降も追加
時間：90分
参加人数：106名

養育者への資料）暴言は子どもの脳に突き刺さる >>

悩んでいることを一緒に考え、目指しているところまで進めるため、傾聴だけでなく一歩踏み込んだサポートをおこなっています。目標に近づかないサポートでは意味がないと考え、相談者に必要な心理学（アサーティブ、認知行動療法、レジリエンス）の訓練や情報収集までを行いながら、資料を個別に作成。1回で、ヒントが得られたという方もいれば、子どもの家庭内暴力など問題が起きる毎に相談に来る方、2週間に一度の定期的ピアサポートを続け、3～4カ月で一度卒業する場合などがあります。親の年代は、30代～40代が中心ではあるものの、60代～70代の親も40代の子どもの心配し、相談に来ています。（ピアサポート中は、撮影をしておりません。）

子育てから逃げないで、乗り越える道と一緒に探しましょう！



4. 災害ボランティア（グループピア）

7月のメニューは、焼肉 >>

会場：平成が浜仮設住宅内（集会所・談話室）
実施日：①昼食 2019.4～2019.9/月1回
②スイーツ 2020.1～2020.2/月1回
参加人数：①各回 25名前後 ②各回 10名前後



一人で悩まず、同じ経験をした仲間と話をすることから始めるグループでのピアサポート。カラオケや昼食を食べながらおこなうことで、会場へ足を運びやすい雰囲気♪



◆実施に伴う効果

【効果1 活動のPR】

活動 1 年目の課題である「周知」のため、「学び」と「ピアサポート」を盛り込んだ楽しいイベントを毎月開催。Line 登録会員には優待制度を持たせ、申込みなど簡単にできるようにしたところ、2019年4月1日から開始し、2020年1月末で190名を超えました。その結果、周知がしやすくなり、イベント案内開始後わずか数時間で締切りとなるイベントも。「届けたい情報を届けたい人に」の一歩となりました。

【効果2 ピアサポートの必要性】

殆どの方がピアサポート中に涙を流しながらも、次第に笑顔が出てきます。第三者であるがゆえに話しやすく、一緒に考え、解決するまで継続して相談できる場が必要だと再認識。また、子どもの対象は中学生中心でしたが、小学生の親から要望が始めました。「ここに来て話をすると落ち着く」という不登校の中学生は、週1回のピアサポートを頑張った結果、2ヶ月で、毎日遅刻せず保健室登校できるようになりました。

【効果3 みんなで支え合うことの効果は大きい】

イベントでは、グループによるピアサポートをおこなっています。その際、同じ立場（親）の悩みに対してうなずく姿が多く見られ、「自分だけじゃなかった」という安心感と少人数の話しやすさの効果で、座談会は時間延長になるほど話が続くことも。同じ立場のみんなで話し、模索することの効果を感じています。

◆苦勞した点

【Line 相談の難しさ】

子育て中は外出が大変ということを考慮し、無料での Line 相談を会員向けにおこなったところ、気軽さゆえに早朝から深夜まで相談が続きました。しかし、暴力行為の状況を連絡してきても簡単に文字で伝えることは難しく、その他の相談においても1~2回の Line 相談で解決はできません。また、文末に「！」をつけるか否かにより受け止め方も変化するため、慎重に返信する必要がありました。親にとっては、気軽に相談しやすい手段ですが、答える側にとっては負担がかかりすぎることから、見直しが必要と感じています。

【ピアサポート（個別相談）にかかる資料準備】

毎回の状況をヒアリングしながら、その都度資料を作成して構成を考えるため1回の準備に時間を要するのですが、この個別資料は大切に省くことはできません。より多くの相談に対応するため、プログラミング言語のカプセル化のように小さく分類したものを組み立てていくなど負担を少なくする対応を考えています。

【限られた活動時間】

スタッフは仕事をしながらの活動で、いつも時間に追われていました。何とか1年間走り続けることは出来たのですが、次年度は、前期と後期での組み立てや、あえて活動を控える月も設けるなど、落ち着いて展開できるようにしたいと思います。

◆今後の課題・発展の方向性

【今後の課題】

1回、2回のお手伝いとしてではなく、継続して取り組めるスタッフと一緒に進みたいと思っており、スタッフにとっても良い環境を整えられる団体を常に意識していますが、まだまだ遠いと感じます。また、現在は相談用の個室がない中で続けていますので、早急課題として相談用の個室準備を考えるとともに、継続していける事業計画の組立てなどやるのがたくさんです。

【発展の方向性】

子どもが出来てからサポートするのではなく、子どもを産む前から、結婚した時から、結婚する前から…視点を少しずつ変えてのサポートをするため、任意団体から法人へ移行する準備をしています。また、広島市以外での活動も視野に入れており、自主運営が出来る団体として、3年後、5年後を見据えながらステップアップしていきたいと思っています。

◆活動を終えての感想・意見等

昨年春、助成金採択の連絡をいただき、スタッフ一同、事務所で喜んだあと、急に責任を感じて緊張したのを今もよく思い出します。あれから精一杯走り続け、課題を明確にすることができました。また、助成を受けたことにより、他団体との交流、活動の視察、成果報告会など貴重な経験をする事が出来て、支援（助成）いただくということの意味のわかった一年間でした。スタートラインに立ったばかりの私たちに走り始めるきっかけをいただき、ありがとうございました。

次年度は、一つずつ課題を乗り越え、継続していくための基盤作りに取り組んでいきます。これからは団体の力が試される時期。助成に頼らない自主運営できる力をつけることなど厳しい目標を立て、また1年間走っていきます。何年後かに「小さい団体でも、がんばれば何とかなるんだなあ」と皆さんに思ってもらえたら嬉しいです。

活動名	No.21	団体名	アウトドアコミュニティ ハンターキッズ
親子ではじめるサバイバル教室		活動拠点	広島県広島市東区
		代表者	青木 俊介
		支援金額	22万円
活動概要			
<p>○実施日 令和元年 11月10日(日) 10:00~17:00</p> <p>○場所 CLIP HIROSHIMA (広島市中区東千田町 1-1-18)</p> <p>○参加人数 親子10組28名(大人13名 子ども15名) ※スタッフ4名</p> <p>○内容</p> <p>～スケジュール～</p> <p>10:00 現地集合 (開会挨拶、講師紹介、目的の説明、アイスブレイク)</p> <p>10:30 (ロープワーク、ブルーシートを使ってのシェルター作り)</p> <p>12:30 (火起こし体験、非常食作り)</p> <p>15:00 グループディスカッション(非常時の準備物について考える)</p> <p>16:00 振り返り</p> <p>17:00 片付け、閉会、解散</p>			



ロープワークを学びシェルター作り



火起こし体験(メタルマッチでの着火)



お湯を沸かして非常食作り



非常持ち出し袋の確認

◆実施に伴う効果（青少年育成にどのような影響があるか）

・思考力の向上

「どうしたらこれが達成できるのか」「どうしたら前より上達するか」などと考えることで、思考力の向上。

・自分の意見を主張

自分の考えをまとめて実行したり、相手にわかりやすく伝えたりするなどの能力が身に付き、その結果、自分の意見を言うことに慣れていき、やがてプレゼン能力が向上していくことも期待できる。

・問題解決能力の向上

子どもが自分なりに試行錯誤することで、納得のいく答えを導き出したり、自分の本意とは違う結果を受け入れたりする場面があった。その経験から、問題にぶち当たった時にも諦めたりせず、どうすれば解決できるのかをしっかりと考えるようになった。

・知的好奇心が伸びる

子どもたちは今回のイベントで新しい発見があったと思う。その結果、自分で考えることの楽しさや、気づくことの喜びを知り、知的好奇心の向上につながった。

◆苦労した点

・参加した子どもたちの年齢差があったため、進行のスピードや言葉の使い方などに注意してレクチャー部分の理解を進めるよう配慮が必要だったこと。

・安全管理についても同様に小さな子どもでも理解できるような言葉使いが必要だった点。

・当初、一泊二日のキャンプイベントを企画していたが、3か月前からの告知にも関わらず1組しか集まらない状況だった（集客方法としてSNSや知人をお願いしてチラシを置いて頂くなど）。そこで急遽イベントでの開催に変更した（そのため活動名も変更）。集客失敗の要因としては、イベント開催地の利便性（交通機関が使えず自家用車のみでの参加者しか難しかった）一泊イベントのハードル（主催者が知らない方だと、どうしても不安に思われる方もいるので、今後は「イベント→一泊イベント」のような連動ができるよう仕掛けていきたい）が挙げられる。

◆今後の課題・発展の方向性

【課題】

・参加者は親子共々、体験したことに非常に満足していた様子であったのを見て、やはり集客に向けた告知を工夫し、興味関心をそそること。

・この様な活動を支援してくれるネットワークづくり。

・上記に伴う指導者養成とスタッフの育成。

【発展の方向性】

昨今の大きな災害や天候変動による異常気象によりいつ何処で災害に遭遇するか測り得ない。安全に自身の身を守り生き延びるために何をしたら良いのか？ 情報過多の中、溢れる情報の何を取り入れていくか？ を広く啓発する必要がある。業者からの情報を鵜呑みにして思考停止し、ただ与えられたものをそのまま準備するのではなく、自身で体験し自分の状況に合った防災準備をする事、それは子どもの教育を根底から変化をさせるためにも必要不可欠だと思ふ。

◆活動を終えての感想・意見等

前述しましたが、参加者は非常に満足していた様子が伺えました。幼児までもが帰宅後ロープワークの練習に取り組んでいた様子が参加された保護者から送られてきました。小さな活動でも数を多く開催すれば良いと感じました。また小さなお子様をお持ちの保護者もこの様なイベント講習の対象になると感じたので、子育て支援を応援する団体とコラボすることでもっと幅広い世代に啓発できると感じました。

活動名	No.22	団体名	宇部市地球温暖化対策ネットワーク
育って！ 拡がれ！ 未来の地球 ミニソーラーカー工作教室		活動拠点	山口県宇部市
		代表者	溝田 忠人
		支援金額	26万円
活動概要	<p>新エネルギーの普及、科学少年・少女の育成を目的に、市内3箇所で開催されたイベントと夏休み(1回)に小学生を主対象に「ミニソーラーカー工作教室」を実施した。</p> <ol style="list-style-type: none"> 5月5日(日)「新天町子どもまつり」 場所：新天町アーケード(ハミングロード) 参加者：30名 ペットボトルソーラーカー工作 7月28日(日)「夏休み工作教室」 場所：多世代ふれあいセンター 参加者：27名 太陽電池の話と電池でも走るソーラーカー工作 10月19日(土)「まちなかエコ市場」 場所：銀天エコプラザ 参加者：29名 プラダンソーラーカー工作 11月10日(日)「まるごと COOL CHOICE in Library」 場所：宇部市立図書館 参加者：29名 プラダンソーラーカー工作 		
 <p>ペットボトルソーラーカー</p>		 <p>電池でも走るソーラーカー</p>	
		 <p>プラダンソーラーカー</p>	



5月5日(日)「新天町子どもまつり」



7月28日(日)「夏休み工作教室」



10月19日(土)「まちなかエコ市場」



11月10日(日)「まるごと COOL CHOICE in Library」

◆実施に伴う効果

- 115人の子ども達が、自分の作ったソーラーカーが光で動いたことに驚き、太陽光エネルギーを身をもって体感すると共に科学工作の面白さを経験した。
- 子どもに付き添ってきた保護者も、子ども達と一緒に太陽光エネルギーや工作の面白さを体験し、太陽エネルギーや科学工作の必要性を再認識した。
- 工作教室と同時に実施したパネル展示や省エネクイズなどが、地球温暖化防止活動の啓発となった。

◆苦労した点

- イベントでの参加者の確保：初めて参加した「まちなかエコ市場」「まるごとCOOL CHOICE in Library」の工作教室は、イベント全体に小学生の来場が少なく参加者が目標に達しなかった。
- 夏休み工作教室工作時間：工作手順の説明や工作キットの分かり難さ等もあり工作時間が延びてしまい最後の部分が駆け足となり、予定時間も若干超過した。
- 材料の調達：今回初めて使用したソーラーモーターの品薄の状況が続き調達に苦心した。

◆今後の課題・発展の方向性

- 夏休み工作教室：
 - ①今回、工作時間が予定どおりに進まなかったため、キット点数、工作手順、指導方法など再検討をする。
 - ②自主的に作る部分・友だちと協力して作る部分などを入れ、工作物に個性が表現できるように工夫する。
 - ③工作終了後、作ったソーラーカーで参加者全員が楽しめるよう工夫する。
- ボランティアの増員・養成
参加者をもっと増やし、内容を発展・充実させるための要件は資金と人手です。資金は助成金をいただければなんとかできるので、人手不足が活動のネックです。現在自主的に活動に参加をいただいているボランティア5名とUNCCA スタッフで手一杯(キット製作・工作指導)の状態です。従って、新たなボランティアの獲得が発展のために必須の要件です。

◆活動を終えての感想・意見等

ミニソーラーカー工作教室を始めて10年が経過しました。この間、41回教室を開催し、1120人の子ども達がミニソーラーカー工作を体験しました。屋根に太陽光パネルを取り付けた家庭が増加しソーラーパネルは子ども達にも珍しいものではなくなりました。それでも工作を終って試走するとき、自分の作ったソーラーカーが光を受けて動き出した時の子ども達のびっくりしたような笑顔は10年前と変わることはありません。その笑顔を見た時の達成感が私たちの活動の源です。これからも再生可能エネルギーの増加を目指してこの活動を継続したいと思います。

活動名: 「温故知新プロジェクト」 (2期目)

若い力で私達の街を国際学園都市に発展させよう!

(1期目のインフラ整備をベースに活動をフラッシュアップ)

団体名	NPO法人 ワン・フォー・オール
地域	山口県宇部市
代表者	河野 邦彦
支援金額	30万円

宇部市:教育機関が多く 留学生比率高い
250人/10万人当たり(全国トップクラス)

- 参加留学生:21か国100人
- ・地元と交流したい
- ・日本文化を学びたい
- ・情報発信したい

- 参加高校生:40人
- ・国際交流したい
- ・留学したい
- ・海外で仕事を...



古民家 活動



古民家で夏祭り
地元の歴史風土を紹介



国際交流

活動写真

Happy Holidays



各国料理を持ち寄って...

若手リーダー達
(中心は高校生)



世界のダンスを一緒に...

			実施内容
テーマ/開催時期	場所	内容 (全て留学生、地元青少年参画)	参加者 (延べ)
1) 古民家の整備 (通期)	宇部市内5軒	① 庭・花壇の整備 ② 保善・補修	400
2) 耕作放棄地の再生 (通期)	宇部市内 1,500㎡	耕作放棄地を畑に再生、野菜を栽培 "Glocal Farm"と命名新しい活動拠点に	600
3) イベント			
① 古民家国際交流会 (毎週末実施)	・古民家 ・中山間地区	・在留外国人、青少年の文化交流会 ・食事は、上記の野菜を使用	1,000
② 世界と遊ぼう (6回:2ヵ月毎)	・山口大工学部 ・宇部高専 ・宇部高校 等	・各国の歴史、文化、遊びの紹介 : 学習や遊びを通し相互理解深める ・スポーツ教室(講師付) : フットサル、タグラグビー等 ・日本の音楽、着付け(講師付)	1,000
③ 活動発表会 (5回:4半期毎)	・留学生会館等	・宇部留学生交流会で4半期毎に定期発表 ・今期は加えてマツダ財団成果発表会に参加 ⇒メンバーのプレゼン力向上	800
4) 協働活動(通期)		山口大学中野講師との協働活動	利用者 1,000
① 留学生用医療情報の整備	・宇部市 ・山口市	① 大学周辺医療機関の外国人対応調査 留学生在が利用し易い医療マップ作成	
② 異文化交流心理面の調査研究		② 異文化交流における心理状況を調査 より良い交流方法を模索	計(人) 4,800

実施に伴う効果

- ① 高校生メンバーの自主性向上
- ② 周囲の関心の高まり: 関与者増大
21か国延べ5千人: 前期比千人増

高校生考案
の活動ロゴ



成果・課題

Act Locally

Think Globally

成果物

「留学生向け医療マップ」
山口市・宇部市の全医療機関調査
アンケート、聞き込み: OJT

医療機関の情報整理
(山口大用)

- ・英語対応力
- ・女医の勤務体制
- ・7か国語の日本語対応問診票

↓
好評につき、山口大以外からも
利用要請があり、検討中

意見・感想

- (高校生)
- ・学校にはない貴重な体験
 - ・宇部で留学しているみたい
 - ・積極性が出て来た
- (留学生)
- ・家族(幼児)も参加有難い
 - ・もっと友人を誘う

苦勞した点・課題

- (高校生)
- ・3年生は受験で参加減少
 - ・男子の割合が少ない(20%)
 - ・塾、部活等スケジュール調整

- (留学生)
- 宗教等の規制
- ・モスリム: ラマダン(断食)
ハラール フード
お祈りの時間
女性との接し方
 - ・ヒンズー: 牛肉禁止
 - ・ベジタリアン
- ⇒関係者と相談しながら
対応力を向上させている

発展の方向性

本事業は3年計画の2期目

- ・3年計画で国際交流若手リーダーの育成システム構築に取り組む。2期目迄に基礎固めが出来た。
- ・OJTを継続、Glocal(国際的視点で課題を捉えた地域活動)で、多文化共生社会の構築を目指す広い視野を身に付けてもらう。

- ・課題に掲げた点を精査
保護者、学校の理解、宗教上の制約等に対して誠実な対応を取り計画を進捗させる。

- ・マツダ財団様助成金活用
電子黒板等文具を整備して活動を推進したい。

活動名	No.24	団体名	日本宇宙少年団 周南分団
ものづくり科学教室		活動拠点	山口県周南市
		代表者	志水 慶一
		支援金額	10万円
		活動概要	
<p>毎月1回、全10回活動しました。活動内容は下記の通りです。</p> <ul style="list-style-type: none"> ➤ 会場： 社会見学以外は周南市久米市民センター（7月のみ周南市市民交流プラザで実施） ➤ 開催日： 原則第3日曜日 13時～16時 約3時間 ➤ スタッフ： 約10名。事前研修で活動内容を習得し、当日の活動を指導・補助 ➤ 参加者： 青少年（定員20名）とその保護者、スタッフで社会見学以外 毎回40～50名 <p>4月：科学で遊ぼう／綿菓子機をつかって綿菓子を食べよう ・・アルミボトル缶、ミニモーター、ざらめ 5月：科学マジック?! 君もマジシャン ・・ 消える水、バンジー卵、十字ストローなど 6月：温度計をつくろう ・・アルミ箔とセロファンのパイマテリアル利用 7月：レオナルドダビンチに学ぼう ・・投石器、歯車、角棒で自立する橋の組み立て 8月：光の不思議と立方体万華鏡の製作 ・・屈折、反射など光の不思議を体験し科学の目で理解する 8月：社会見学 ・・山口のパラボラ館（電波通信、静止衛星）、県立博物館（ドローン特集） 9月：美味しい科学 ・・近隣企業（株シマヤさん）の出前教室（味噌づくり）発酵について学ぶ 10月：社会見学 ・・徳山高専 学園祭・ロボットコンテスト、情報技術、お化け屋敷 11月：磁力で回る目も回る／電磁石と永久磁石のコラボ ・・電気回路、磁気回路を学び工作 12月：アルキメデスになって工作・実験 ・・浮力実験、ピアノ線からコイルバネの製作</p>			



アルキメデスになって工作・実験



磁力で回る目も回る／電磁石と永久磁石のコラボ



レオナルドダビンチに学ぼう／講師へのお礼挨拶



社会見学／山口のパラボラ館

◆実施に伴う効果

本年度の活動は活動を始めて11年目となる。過去10年間の活動の成果と考えられるが参加者は活動拠点の周南市、近隣の光市、下松市はもとより島根県津和野、山陽小野田市、山口市、防府市など遠方からも多く参加された。本活動が幅広く周知されているものと考えている。本年度は、青少年と保護者の延べ数の合計は約400名に達し、ほぼ定員一杯が続いた。

本活動は青少年と保護者が一緒に科学実験・工作の体験学習をするものであるが親子の絆の醸成、ものづくりや科学の啓発に大いに役立ったものと考えている。

新規参加者は友達の紹介、口コミなどによるものが多いことから本活動が参加者に高く評価されているものと考えている。活動においては青少年に社会性を育成するため自己紹介、質問、お礼の挨拶など発言する機会を頻繁に設けている。活動経験が増えるにつれて科学知識や技術を習得し、社会性も持った自信あふれる澁刺とした青少年に成長していくのが認められる。

◆苦労した点

若干の予定変更はあったものの予定した活動を実施することができた。苦労した点は以下の通り。

- ・開催日、会場の関係・・・開催予定日に選挙の投票日が重なり、急きょ講師との調整、別会場の確保にあたふたした。会場、日時は変更となったが無事開催することができた。
- ・社会見学・・・毎年、新年度に入ってから見学先との調整を行うが、見学用バスの確保、見学先との日程調整に苦労する。今年度はバスを確保したものの、参加者募集すると自家用車で参加希望が多くバスをキャンセルすることとなった。無事活動を終えることが出来たが、見学先の確保、交通手段の確定など今後も付きまとうものであり、今回の問題を参考にしたい。
- ・費用の関係・・・予定した助成先からの助成が得られず、希望の備品などの購入が出来ず不自由した。
- ・スタッフの関係・・・増減があり人数的にはほぼ同数だが、高齢化が進み、高齢化ゆえの問題がある。

◆今後の課題・発展の方向性

今後の課題：活動継続のためには①ボランティアスタッフ②テーマ③資金④参加者が必要。

- ①ボランティアスタッフは高齢化が進んでおり新規の確保、若返りが喫緊の課題。
- ②テーマについては、指導者のモチベーションアップのためにも毎回新規テーマで実施することを目標に掲げているが、絞り出すような感じで四苦八苦している。
- ③資金は多くを必要としないが、活動が長年になると助成先も少なくなる。スタッフの持ち出しでは長期活動は困難であり何らかの対策が必要。
- ④参加者数が少ない回もあるが概ねほぼ定員である。魅力あるテーマ&活動内容、現状程度の参加費であれば参加者は確保できるものと考えられる。

発展の方向性：11年間活動できたことより本活動のニーズがあることを実感している。そのニーズを深掘し、近隣産官学との連携などを図りながら本活動を周南市・近隣市町の青少年育成の場として根付かせたい。

◆活動を終えての感想・意見等

毎年、多くの青少年が分団活動に新規に参加し、数年後には分団を巣立って行きます。一緒に活動し失敗や感動を共有しながら、参加者が成長するのを実感出来たのは素晴らしく、遣り甲斐を感じたところです。

本年度も学ぶことが多く、楽しくもあった活動が青少年の育成にも大いに役立ち素晴らしい一年でした。

来年度も更に充実した年とするべく努力し、青少年と一緒に楽しみたいと考えております。

活動名	No.25	団体名	日立のぞみ会
地域社会と連携した子育て健全育成サポート		活動拠点	山口県下松市
		代表者	永田 久則
		支援金額	28万円

活動概要

1.親子プログラミング教室（ステージⅠ）

2020年度より小学校でプログラミング教育が必修化、文科省の学習指導要領では「プログラミング的思考」を学年ごとに課題が提示されています。子供向けに開発されたプログラミング言語の「スクラッチ」で小型パソコン「ラズベリーパイ」と日立のぞみ会が独自に開発した「フォークリフト型ロボット」を用いて、学習したプログラムで実際にロボットをいろいろ制御して動かすプログラミング教室を実施しました。

(1)第2回親子プログラミング教室

日時：2019/4/13・14 & 20・21

場所：日立笠戸労働組合会館

参加者：午前:23組(46名) 午後:21組(42名)

(2)第3回親子プログラミング教室

日時:2019/7/27・28 & 8/3・4

場所:日立笠戸労働組合会館

参加者:午前:8組(16名) 午後:9組(17名)

(3)小学校教師対象のプログラミング出前講座

2020年度よりプログラミング授業が必修になるが、プログラミングについて全く知識がないので、日立のぞみ会が実施している親子プログラミング教室の内容を、小学校教師を対象に出前講座の依頼があり実施しました。

日時：2019/8/21 場所：下松小学校パソコン教室 参加者：30名（小学校教師）

2. 地域社会と連携した「子供ものづくり工作」の支援

下松市内豊井地区公民館より「公民館祭り」で「子供ものづくり工作」の出展依頼があり、「CDコマ」「ストローかざぐるま」「木登りキツツキ」等のものづくり工作を地域の子供達と実施しました。

日時：2019/10/27 場所：豊井公民館 参加者：50名



「親子プログラミング教室」全景



自作のプログラミングでフォークリフト型ロボットの自動走行



小学校教師対象のプログラミング出前講座



公民館祭りでの「子供ものづくり工作」

◆実施に伴う効果

1. 親子プログラミング教室（ステージⅠ）：以下「親子P教室」と記述

2020年からの文科省の学習指導要領では「プログラミング的思考」を中心に学年毎に課題が提示されています。市教育委員会や各小学校でもプログラミング教育に対する関心が高まって来ましたがどの様に取り組むのか検討がやっと始まった状態でした。日立のぞみ会の「第2回・3回親子P教室」は下松市教育委員会や各小学校から多数見学に見え、多くの親子が熱心に取り組んでいる様子を見て関心が高まったようでした。その後、下松小学校からは教師を対象に親子P教室と同じ内容での出前講座の依頼や、他の小学校からも独自開発のロボット走行授業の支援依頼もあり、学校現場でも実際に行動してみようという成果につながったと評価しています。

出前講座を実施後、校長や担当の先生達とのミーティングの中で、「総合学習の中でのプログラムの思考」を取り入れる事になっていますが、まだまだ手探りの状況で、まずはロボットを動かすとか、既存のパソコンで操作してみるとの状況だとの話を聞き、我々も学校現場と会話ができたことは相互に良い成果があったと評価しています。

2. 親子ものづくり教室

日立のぞみ会開催の「親子ものづくり教室」が地域社会から評価されて、各地の公民館祭りで「子供ものづくり」の出展の依頼があり、数多くてんてこ舞いの思いながら、地域社会と連携した子供ものづくり支援を実施するようになり、我々も大きな生きがいを感じました。

◆苦労した点

プログラミング教室の最適な参加人数は10組～15組位でないとプログラミングの内容を理解して頂けないのではないかと危惧していましたが、第1回の開催の際には、初めてのプログラミング教室だったことから応募者が殺到し58組の申し込みがあり午前・午後の2部にして実施しました。参加者人数が多すぎてサポーターもプログラミングにまだ不慣れで適切な支援が出来なかったり、2～3名の講師が遅れがちな参加者の支援をすることで講義が進まなかったりと、初期は反省点がありました。また、独自開発したばかりのフォークリフト型ロボットを使って、プログラミング教室でロボット走行を実施しましたが、ロボットの信頼性も未熟だったことや、子供たちの自由な操作もあり、思うように動かず混乱しました。

昨年7月に開催した「第3回親子P教室」では参加募集20組に対し参加者は17組で未達になりました。しかし、午前の部8組、午後の部9組としたため、結果的には密着支援が出来たのと、皆さんにプログラミングの内容を理解してもらえたと思っています。又、ロボット走行でロボットに不具合が発生しても、予備ロボットを確保出来たため混乱する事はありませんでした。これも前回までの反省点が生かされたと感じています。今後の親子P教室を開催する際は設備と講師やサポーターの能力に合った人数を募集する工夫も大切だと思いました。

◆今後の課題・発展の方向性

日立のぞみ会の「親子P教室：ステージⅡ」は学校教育では揃えられない機材や設備で、ものづくり産業や情報産業等々のICT, IoT, AIに繋がるような新型ロボットを作り、障害物を避けながら条件制御の「システムの思考」が体験でき、且つ、参加しやすく日数を減らした講座にする方針です。

(1) ハード面：既存のロボットから脱却し、市販のロボットにはない自由度の高いラズベリーパイを搭載して独自に新規開発した自動車型走行ロボットに複数のセンサーを搭載して、より高度な「システムの思考」のプログラミングで制御できる信頼性のあるロボットを20セット製作し「親子P教室」の講座で使用し、信頼性を向上させる。

(2) ソフト面：現在、自動車業界で進められている自動運転や安全運転機能を見習って、障害物を避けながら自動走行するプログラミングを目指して「親子プログラミング教室（ステージⅡ）」の講座を実施する。

◆活動を終えての感想・意見

今年度の日立のぞみ会の「親子P教室」を終え、2020年から始まる小学校の必修化されるプログラミング教育の内容が、少しずつ見えてきました。日立のぞみ会のプログラミング講座の内容は小学校でのプログラミング授業とは異なりより高度な内容になっていました。

日立のぞみ会のプログラミング講座は、小学生が学校でプログラミングを勉強してプログラミングに興味を持ちより高度な勉強をしたいと思う子供達の受け皿や、親子の家庭でのプログラミング環境づくりのキッカケになれば良いと思っています。ご支援が「SDGs：4項目の高度な教育」に繋がればと期待しています。

活動名	No.26	団体名	おごおりウィークエンドアドベンチャー 実行委員会
おごおりウィークエンドアドベンチャー		活動拠点	山口県山口市
		代表者	高橋 則彦
		支援金額	15万円
活動概要	<p>～背景～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・週休2日制の始まりである平成11年度に活動開始。平成31年度で21期生。 ・子供達の地域の受け皿として原則毎月第2土曜日に活動。 ・様々な家庭環境の子供が参加するため、家庭への負担により不参加の子供がでないよう、負担減を心がけているが、年会費等を増額又は行事ごとに必要経費を集める必要がある状況。 <p>～目的～</p> <ul style="list-style-type: none"> ・学校・学年を超えた班（地域内3小学校の4～6年生）で、様々な生活・自然・社会体験活動を行う。 ・活動を通じて子供達の主体性や生きいきとした感性を育てることを目的とする。 <p>～平成31年度活動内容～ 平成31年度団員登録数 68名</p> <p>5月11日（土） 小郡地域交流センター “入団式” （団員66名、実行委員19名） 名札づくり、班長/副班長決め、スタッフ紹介、保護者への活動説明等を行う入団式。</p> <p>6月8日（土） 大内塗体験～電車でもかけよう～ 交流センターから電車でふるさと伝承センターへ行って、大内塗の箸づくりを行う。 （団員64名、高校生8名、大学生1名、実行委員26名）</p> <p>7月13日（土） ちよこつとサイクリング（農高で動植物見学） 自転車、地域内の山口農業高校まで移動し、動植物の見学やピザ焼きを行う。 （団員63名、高校生16名、大学生7名、実行委員18名）</p> <p>8月2・3日（金・土） キャンプIN秋穂（ヨット教室・海水浴） バス教室、バスを利用した移動、砂浜清掃、海水浴、ヨット体験 等 （団員59名、高校生6名、実行委員27名）</p> <p>9月14日（土） 秋の大運動会（保護者観覧可） 大会種目を班で協力し合って、優勝を目指す。 （団員65名、高校生7名、大学生2名、実行委員25名）</p> <p>10月5日（土） レクリエーション大会 ウォークラリーに参加し、小郡地域内の史跡等新たな発見をする。 （団員61名、大学生1名、実行委員16名）</p> <p>11月16日（土） 鉄人挑戦（ツールド秋吉台42.195km） 交流センターから秋吉台を自転車で往復 （団員37名、大学生1名、実行委員22名）</p> <p>12月14日（土） 植樹に挑戦（サイクリング・奉仕活動） 自転車で山口大学まで移動し、ライオンズクラブと一緒に、山の手入れと植樹を行う。 （団員47名、高校生2名、実行委員14名）</p> <p>1月11日（土） 餅つき、カルタ大会 日本の伝統行事に参加。 （団員56名、高校生2名、大学生1名、実行委員20名）</p> <p>2月8日（土） スキー教室（191やわたハイランド） スキー講師を招き、個人のレベルに合わせたスキー教室 （団員59名、高校生2名、実行委員17名）</p> <p>3月14日（土） 修了式・ぎょうざ作り 班で協力し、思い出の詰まった至高の餃子を作る修了式。</p>		



入団式～さあ、今こそアドベンチャー！～



秋の大運動会 息を合わせて？ジャンプ！



ヨット体験 ゴムボートに乗るのがまず大変・・・。



スキー教室 最初は板を着けてはまず練習からです。

◆実施に伴う効果

- ・学校・学年を超えた班（地域内3小学校の4～6年生）で、様々な生活・自然・社会体験活動を行うことができた。
- ・週休2日制となった子供達の地域の受け皿として、原則毎月第2土曜日に活動を実施した。
- ・活動を通じて子供たちの主体性や生き生きとした感性を育むことに寄与した。
- ・社会人スタッフのみならず、高校生・大学生のボランティア参加を受け入れることで、学生へ子供との活動の場を提供した。

◆苦労した点

消費税を含めて、様々な経費が値上がりする中で、様々な家庭環境の子供が参加するため、家庭への負担により不参加の子供が出ないように負担減を心がけているが、年会費等を増額せざるを得ないこと。

◆今後の課題・発展の方向性

野外での活動が主なため、子どもの安全確保に人手を要するが、社会人スタッフの高年齢化に伴い、必要な人員の確保に苦慮している。また、新たな活動内容を検討する際には交通費等の移動費用の確保と自転車の場合は子供の体力低下が課題となっている。

毎回、学生ボランティアの参加があることから、学校教育に関心のある生徒・学生には更に御協力いただき、将来の会を担う人材となしてほしい。

◆活動を終えての感想・意見等

スタッフとしての活動は休日の返上等、負担になる面もあるが、大人も子供とともに活動を楽しむとともに、子供たちが様々な活動に挑戦し、自分なりに頑張り、「初めてだった／楽しかった／大変だった」と感想を述べる子供たちが、大きく成長する様子を目の当たりにすることがやりがいとなる。

活動名	No.27	団体名	災害復興支援団体 山口災害救援
山 災 塾 (若者対象災害ボランティア育成プロジェクト)		活動拠点	山口県防府市
		代表者	村林 理恵子
		支援金額	35万円
	活動概要		
<p>未来を担う子どもたちが、将来起こりうる自然災害に対しての正しい知識を持ち、自分の命・家族の命を自ら守ることができるようにする。また、被災した後の復旧・復興への取組等を知ることにより、災害ボランティア活動及び平常時における地域での支え合いの大切さを理解し、自分にできることを考え、実践できる力を養うことを目的とする。</p> <p>・第1回「災害とボランティアについて」 日程: 6月9日(日) 午後1時～午後4時 参加人員 46名</p> <p>・第2回「災害ボランティアセンターについて」 日程: 7月14日(日) 午後1時～午後4時 参加人員 45名</p> <p>・第3回「被災地での活動」 日程: 8月11日(日) 平成30年7月豪雨災害被災地 広島県呉市天応 現地視察・被災地炊き出し支援 参加人員 53名</p> <p>・第4回「わたしにできること」 日程: 9月8日(日) 午後1時～午後4時 参加人員 36名</p>			



第1回目 参加者 46名
 災害とボランティアについて
 災害にはどのようなものがあるのか、またどのような危険があり、どうすれば命を守れるのかを知る。さらには、被災者を支援する活動にはどのようなものがあるのか、また被災したらどのような困りごと（ニーズ）があるのか、その困りごと（ニーズ）をどのように解決しているのかを学びました。



第2回目 参加者 45名
 災害ボランティアセンターについて
 災害発生後に設置される災害ボランティアセンターはどの様に立ち上げるのか、また災害ボランティアセンター内の運営方法はどの様になっているのかを学びました。



第4回目 参加者 36名
 わたしにできること
 被災地の現状を思い出し、また今迄の研修内容を思い出し、わたしにできることを考えました。

第3回目 参加者 53名
 現地視察・被災地炊き出し支援
 災害発生後1年経った被災現場状況を知り、被災された皆様と一緒に瓦そばの炊き出し交流を計りました。



実施に伴う効果

山災塾受付登録人数 4 5 名 平均年齢 2 3 歳と予想を上回る参加者。まずは、参加者ひとり 1 人真剣に取り組んでいただいた事に主催者として感謝しております。

4 回の研修会を通じて、参加者の中でボランティア未経験者の人が多い中、経験者からの意見を素直に聞き入れグループにて意見交換が活発化していました。今回の研修では「災害とは」からはじめ、知っているようで知らなかった、疑問に思っている事が解った、との感想をいただきました。自分の命・大事な人の命を守る為にも、災害というものを感じ取れたという参加者もおられました。

令和元年 8 月、福岡・長崎・佐賀を襲った豪雨災害にては、参加者数名が現地に赴き活動されました。被災現場にて、支援活動をしながら「なぜ」と言う疑問が生まれ、なぜ災害が起こるのか、なぜ被災者になるのかを考えていきたいという参加者もおられ、今後の防災・減災に自ら取り組んでいける事を期待します。

◆苦勞した点

この度の企画で、私達が今まで経験したスキル・ノウハウを伝えていくために、若者を対象に研修会を進めようとしたが、どこの若者をターゲットにするのか、自分たちとの繋がりや、と考えると意外に難しく、なかなか進みませんでした。そうした中、県内の大学生の中で災害支援活動をしているサークルを SNS で知り、こちらから参加してくれるようお願いしたところ、大学同士の横の繋がりで情報が伝わり、若者の参加者が増えました。学生側もサークル活動で行き詰っていたようで、この山災塾の話が嬉しかったと言ってくれました。

◆今後の課題・発展の方向性

山口県では平均 3 年に 1 度の水害、いつ発生するかわからない直下型地震。80%になる南海トラフ地震を考えると、この度助成していただき山災塾を開催できたことを 1 回で終わらず、当初の計画通り 5 年計画を実施して、真正面から災害に取り組んでくれる若者を 1 人でも多く増やさなければならないと痛感しています。

私達団体と提携を結んでいる山口県災害看護研究会さんとも力を合わせて、「山災塾パート 2」を実施しなければと考えています。パート 2 では、防災・減災は元より、発災後の対応が出来るスーパーバイザー的な若者を育てていきたいと思ひます。

◆活動を終えての感想・意見等

当初は若者が集まるか不安でしたが、予想を上回る参加者で嬉しい悲鳴でした。毎年の如く日本列島どこかで災害が発生している中、若い人が、特に大学生が沢山参加していただいた事は、私達が今まで経験したことを伝える責務と実感するばかりです。私たち自身が、家族・大事な人を守る人材育成に今後も務めて参りたいと思ひます。マツダ財団様の助成があったからこそ実現したこの企画です。心より感謝申し上げます。

活動名	No.28	団体名	NPO 法人 山口科学技術子供フォーラム
理系子ども育成応援活動		活動拠点	山口県防府市
		代表者	浴永 直孝
		支援金額	12万円
活動概要	<p>①えきなが講座</p> <p>第26回えきなが講座、2019年12月1日(日)、講師：名古屋大学・宇治原徹教授、 演題：「身近にあるいろいろな結晶」、場所：防府市立右田中学校・理科室、 参加者：中学生28人</p> <p>第27回えきなが講座、2020年1月18日(土)、講師：京都大学・安部武志教授、 演題：「エネルギーをつくる、つかう、ためる」、場所：防府市立右田中学校・理科室、 参加者：中学生36人</p> <p>第28回えきなが講座の予定：2020年3月20日(日)、講師：元東京大学副学長・岡村定矩氏、 演題：「宇宙って何だか知っていますか?」、場所：防府市立右田中学校・理科室、</p> <p>②ボランティア寺子屋／社会福祉法人・防府海北園の子供達の学力向上支援 毎週木曜日17～18時実施、講師：浴永直孝、場所：防府海北園、 参加者：主に小学高学年生約130人・時</p>		

第26回えきなが講座講演風景

講師：名古屋大・宇治原徹教授／演題「身近にあるいろいろな結晶」
場所：防府市立右田中学校理科室／2019年12月1日 10～12時



中学生28名の参加
他／大人1名、教諭1名、
会員1名



シリコン単結晶組立の実
験風景



研究成果が出てベン
チャー企業を設立した
ことを報告

第27回えきなが講座講演風景

講師：京都大・安部武志教授／演題「エネルギーをつくる、つかう、ためる」
場所：防府市立右田中学校理科室／2020年1月18日 10～12時



中学生36名の参加
他／教諭4名、会員2名



液体クロマトグラフィー
の実験風景



備長炭電池作成の実験
風景

◆実施に伴う効果

えきなが講座に参加してくれた中学生が、身近でハイレベルな研究を行っている講師の講演を聞き、体験実験も経験することにより、科学技術について理解が深まったと考えている。この中学生達の中から、将来の日本の科学技術の向上に貢献する人物が出てくることを信じている。

◆苦勞した点

- ①講師は、普段は大学院の学生を指導している。そのレベルの専門用語は中学生には理解出来ないので、講演内容の選定や専門用語は使わないで説明するなどの努力をしている。
- ②NPO法人側は、各えきなが講座で2つの体験実験を立案実施しているが、科学や技術についてその本質に迫る体験実験にすべくテーマの変更や改良などの努力をしている。
- ③本来は、参加者の人数と開催場所に最も苦勞するところであるが、ある理系教諭のご理解で、現在は右田中学校を開催場所とし、その教諭が中学生に声を掛けて頂いていることにより、非常に楽に実行出来ている。

◆今後の課題・発展の方向性

- ①えきなが講座の内容については、現在でほぼ満足しているので、継続あるのみ。講演内容は毎回大きな変化は無いが、参加の中学生の方が入れ替わるので学校教育と同じで、それで問題は無いと思っている。
- ②えきなが講座以外の活動として、現在理事長だけが社会福祉法人・防府海北園の子供達の学力向上支援を行っているが、会員の中から講師を育成し、市内全域を意識して、主に恵まれない子供達に対して、もっと幅広く学力向上支援が行われるような基礎造りを始める予定。

◆活動を終えての感想・意見等

今年も右田中学校教諭の協力があり、現在のところ大過なく経過しているので、ホットしている。

活動名	No.29	団体名	公益社団法人防府青年会議所
こどもまちづくりプロジェクト2019 ～未来へつなごう「こども議会」～		活動拠点	山口県防府市
		代表者	島田 一道
		支援金額	40万円

活動概要

《参加者》

小学生5名、中学生11名（最後のこども議会には傍聴者として中学生が+10名程度参加）

《実施日・場所・内容》

- ① 7月6日（土）防府市議会棟 オープニング
参加者同士の交流と事業概要の説明および任命式、保護者への説明会
- ② 7月13日（土）防府市中心市街地 まちあるき調査
防府市内にて実際に現地に赴き目で見て触れて感じる事や、現地の方や施設の方にヒアリングする事で良い所、悪い所を発見した。
- ③ 7月14日（日）防府市文化福祉会館 まちづくりワークショップ
調査にて発見した良い所や悪い所をどうしたら「より良い住みやすい防府」に出来るのかを考え議案に提出する議案を作成した。
- ④ 7月27日（土）防府市議会棟 こども議会準備
市議会について学び翌日の、こども議会の準備・リハーサルを実施。また市議会棟の見学および市議会の説明を聞いた。
- ⑤ 7月28日（日）防府市議会棟 こども議会・クロージング
市議会棟にて市長をはじめとする市議会議員、市職員、行政関係者らに、こども達が議員として模擬市議会を行い一般質問として議案を提出。市議会の現場を体験する事で社会のしくみに触れ今後社会に出る時の糧にすると共に体験を通して自分達が社会に影響を与えられたという喜びと達成感を感じた。

クロージングでは保護者からの労いと関係者からの評価をもらい、今後、自分に何が出来るのか考え自分の将来の夢や防府のまちづくりに対しての意識と自信を持ち、まちづくりの楽しさを知る事で社会貢献の意識を高めた。

オープニング



まちづくりワークショップ

まちあるき調査



こども議会



◆実施に伴う効果

(参加者アンケート) 自己肯定感を高めることが出来ました。また参加者の学校新聞において事業が掲載され生徒、保護者、地域の方へ周知されました。

(保護者アンケート) 事業への理解、賛同を得る事ができ、事業についても家庭で話し褒める事の大切さを実感していただきました。

(協力者アンケート) 事業目的への賛同と今後の継続についての声が多く寄せられました。行政、企業、民間が協働する事の必要性も多く寄せられました。また防府市広報誌に掲載され市民の方へ周知されました。

◆苦労した点

市内小中学校へのチラシ配布、小中校長会・小中学校PTA・菅公みらい塾・防府市学校教育課・江山教育長・その他関係者への募集依頼を行いました。学校事業、地域事業と日程が重なっていたため予定していた24名の募集を達成する事が出来ませんでした。また企画段階から運営に協力していただく部署の担当者と事業の趣旨を説明し細かな内容まで詰め、より強固な協力体制を築き継続していく事、そして運営の一部を依頼するといった調整に苦労しました。

◆今後の課題・発展の方向性

今回の事業を通して防府市役所、防府市議会との関係を構築する事が出来ました。政治への関心を高める事は行政の課題とされており、子どもだけでなく保護者に対しても働きかける必要を感じました。また学校教育課とはスケジュールや事業内容等をより密に打ち合わせる事で、学校教育の一環として取り入れてもらうことが必要と感じています。行政、議会、他団体を巻き込む事で、青年会議所単独の事業ではなく防府市の取り組みとして展開し、市民一人ひとりがまちづくり、青少年育成に興味を持って参画してくれることを期待しています。

今回の事業内容は「知って」「考えて」「伝える」といった複数の要素があり、子ども達の手でやり遂げるには日程が足りなかったかもしれません。事前学習や調査といった部分で日程を増やす事でより良い事業になったのではないかと思います。全員が集まらなければならないのではなく自主的な学習、例えば宿題形式にする、出前事業を行うといった形での対応も検討すべきであったと反省しています。

◆活動を終えての感想・意見等

本事業は青少年育成を目的としていますが、まちづくりへの参画にも寄与出来ると考えています。行政への関心を高めるだけでなく市民一人ひとりがまちに対して主体性を持つ機会を提供出来ます。その為には継続して取り組む事が必要であり、行政、学校との連携を深める事でより効果的な事業とする事が可能と考えています。

自分たちが住んでいるまちを知る事で今まで気付かなかった課題や問題点、魅力を発見してもらう。住んでいる人や働いている人が感じている事、こうしたいという想いを聞く事で「防府の今」を知ってもらう。そうする事で「まちの一員」である事を認識してもらい、まちに対して当事者意識を持ち課題解決に向けた主体性を育ててもらいました。

参加した子ども達には友達が出来た・人の意見を聞いた・困っていたら助けてあげた。そういった経験を通し人の為に、ひいてはまちの為にといった想いを持ってもらい今後の人生においても広い視野を持ってもらえる成長をしてくれたと思います。本事業は小学4年生～中学3年生と異なる年齢の参加者同士が違った視点や学びを得ることで刺激し合い我々だけでは生み出せない学びを与えることが出来ました。また1ヶ月、5日間という長期に亘る事業とすることで各プログラム間に参加者自身が考え成長する機会、また保護者や知人と話すことで得られる気付きや達成感をもって「自分に自信を持つ」という目的に向かってもらいました。子ども議会は継続開催されますが、子ども議会を開催することは手法であり参加者に対する目的は違ってくると思います。子どもが積極的に意欲的に参加し成長する機会とは何なのか考えることも大事ですが今年度足りなかった部分でもある「楽しむ」という要素も是非取り入れてほしいと思います。これは動員だけでなく参加者同士の交流や指導員との距離感にも関係してきます。まずお互い楽しみながら知ることで事業への参加意欲向上に繋がるので検討していきます。

活動名	No.30	団体名	特例認定 NPO 法人とりで
『とりで子ども食堂』・『とりでモーニング』・ 『とりで塾』・『退所児童等アフターケア事業』		活動拠点	山口県岩国市・広島県大竹市
		代表者	金本 秀韓
		支援金額	40万円

活動概要

～地域の子どもたちに対する『子どもの居場所づくり』～

【とりで子ども食堂】

地域の子どもたちに対しての食事と調理体験の提供

岩国市内 2 ヲ所、各会場月に 2 回（いずれかの土曜日 10～14 時）

☆2019年4月
大竹市にて新規会場開始

《活動実績》
計 57 回実施
延べ参加者数 1,670 人

【とりでモーニング】

地域の子どもたちに対しての朝食提供と登校支援

岩国市内にて月に 2 回（いずれかの水曜日 7～8 時）

☆2019年4月
岩国市にて 2 ヲ所目開始

《活動実績》
計 37 回実施
延べ参加者数 1,138 人

【とりで塾】

地域の子どもたちに対しての学習支援

岩国市内 2 ヲ所、各会場月に 2 回（いずれかの火曜日 19～21 時）

《活動実績》
計 42 回実施
延べ参加者数 810 人

総計 3,618 人

【退所児童等アフターケア事業】

児童入所施設や里親家庭等での養育を終えた子どもに対しての相談援助や支援。また退所児童同士が集まり交流できる機会を提供することで『居場所づくり』※グループワークとして、フットサルやソフトラレーを行っている。

《活動実績》
グループワーク計 45 回実施
延べ相談・支援等件数 163 人

※実績数は 2019 年 4 月～2020 年 2 月 間を集計

※3 月は 2～26 日までコロナウイルス感染防止の為、活動休止。

27 日以降は、事態の経過を見て活動再開の判断をする。



◆実施に伴う効果

◎地域の子どもたちに対する『子どもの居場所づくり』の効果

子どもたちからの意見

- ・参加して楽しい、よかった
- ・活動日の日数をもっと増やしてほしい
- ・料理をすることも楽しいし、温かいご飯がおなかいっぱい食べれていい
- ・将来なりたい職業があるからもっと勉強したい

⇒【とりで塾】や当法人が行っている他の学習支援の事業の利用につなげた。

◎退所児童等アフターケア事業

- ・当法人の児童入所施設（自立援助ホーム）を退所した児童を当法人と連携協定の関係にある企業に就労、就労後もフォローを行っている。
- ・退所児童より他の退所児童の現状を聞き、連絡をとって接触。長期に渡る引きこもりであったが、就労につないだ。

◆苦労した点

- ・来期以降の活動資金の確保

⇒企業との協定や応援・支援して頂ける関係構築に尽力した。

◆今後の課題・発展の方向性

発展の方向性

- ・子どもの居場所づくり活動の会場や、回数の増加。
- ・退所児童が『ここに行けば気軽に立ち寄り、相談できる』という拠点の設置。

上記における課題。

- ・マンパワーの不足。

これまで以上に活動地域を増やした場合に必要な担当責任者などの有給職員の確保

ボランティアスタッフの不足等。

- ・活動継続の為に資金源の確保。
- ・拠点設置の為に初期費用の確保。

◆活動を終えての感想・意見等

人を支援対象としているので、なかなか成果を形にすることが難しい取り組みであるが、参加した子どもたちからの嬉しい感想や、アフターケアを行った退所児童が自立に向けて頑張っている姿をみる取り組んできてよかったと思う。

来期以降も継続して行い、『支援が必要だが、様々な事情で支援が届きにくい』人たちをフォローできるように頑張っていきたいと思う。

活動名	No.31	団体名	虹の鯉のぼりプロジェクト実行委員会
虹の鯉のぼりプロジェクト		活動拠点	山口県光市
		代表者	田中 陽三
		支援金額	10万円
活動概要	<p>期間：2019年4月28日（日）～5月5日（日）開催。</p> <p>設置：2019年4月27日（土）（実行委員、ひかり災害ボランティア、中高生ボランティア約130人が災害時訓練も兼ねて人力で設置、土嚢作り、カレーライスの炊き出し訓練も行う）</p> <p>式典：2019年4月28日（日）「虹の鯉のぼりの下に集う会」を開催。 （光市長 市川熙様、光市教育長 能美龍文様も御来賓として参加。）</p> <p>①山口県立光丘高等学校吹奏楽部の演奏 ②宮城県東松島市「青い鯉のぼりプロジェクト」とのつながり紹介 ③光市立浅江中学校「あさなえ Jr.」の地域奉仕活動の発表 ④山口県立光丘高等学校演劇部の野外劇「ぼくんち」講演 イベント「ニジマル」（虹ヶ浜マルシェ）開催</p> <p>撤去：2019年5月6日（月）（約35人のボランティアで実施）</p> <p>後援：光市 光市教育委員会 光市観光協会</p> <p>期間中来場者数 約5,000人</p>		



設置作業 約130人のボランティア参加



災害時の訓練も兼ねて土嚢作りも体験



今年もたくさんの鯉のぼりのご提供をいただきました



災害時の炊き出し訓練も実施



たくさんの方々からご協力・ご支援をいただきました



市川熙市長



山根信昭実行委員長



式典後記念集合写真

◆実施に伴う効果

中学生たちの想いから始まったプロジェクトも6年間続けたことにより式典の発表は高校生たちも巻き込んで広く子どもたちの学びと発表を行える場となりました。

今回初めての取り組みとして新しい若者グループによるマルシェが開催されました。虹の鯉のぼりプロジェクトを中心とした子どもたち、若者の活躍の場づくり、プレーヤーづくりの場になることで、まちの賑わいづくりへとつながりました。

◆苦労した点

マルシェについては初めての取り組みで、公の場の占有許可等を取るのに前例が無く苦労しました。

また、関係者が増えれば増えるほど打ち合わせ等が増え、実行委員メンバーがほとんど現役で働いている子育て世代なので時間的に厳しい部分もありました。

◆今後の課題・発展の方向性

東日本大震災から丸9年が経ち、震災の記憶の無い子どもたちが増え、当時の中学生たちの学びと想いを受け継いでいくためには、今の中学生たちとの関わり方を変えていかないといけない、また、期間中の来場者にもどのように伝えていくのか工夫が必要だと感じています。

広島での活動成果報告会に参加させていただき、メンバーと共にとっても考えさせられているので、今年の開催に向けて内容協議を行っているところです。

◆活動を終えての感想・意見等

今回支援をいただき、新しい若者グループの活動を実現することができ、子どもたちに想いは叶うという姿を見せる事ができました。また、老朽化していたロープを全て丈夫なロープに更新する事ができ、今後もこのプロジェクトを安心して続けていく事ができるようになりました。

これからも東日本大震災を忘れることなく伝え、防災教育につなげるのと共に、子どもたちの想いや夢を応援し、実現させていきたいと思えます。

活動名 No. 32

わくわく土曜塾
～多世代交流 & 国際交流～

団体名 わくわく土曜塾実行委員会

活動拠点 山口県長門市

代表者 藤田 悦子

支援金額 20万円

●活動概要

長門市内に住む小学1～6年生を対象に、1年間様々な体験学習を通じて、子どもの想像力やリーダーシップ、コミュニケーション能力を養うとともに、豊かな心を育む。2006年から活動。

参加者：【土曜塾塾生】55名（通年）、【コーディネーター】20名（通年）、【協力団体】延べ75名

月	日	活動場所	内容	引き受け団体	全参加人数
5	11	長門市中央公民館	開講式（仲間作り・名札作り）	土曜塾コーディネーター	67人
	26	ブルーエンジェルス練習場、クラブハウス	ながとブルーエンジェルスとラグビー体験（国際交流）	ながとブルーエンジェルス	72人
6	8	長門総合公園	花壇の花植え、公園でタイムラリー	長門市市民活動推進課	68人
	22	深川小学校	【高学年】電波教室 ※親子参加 【低学年】工作（傘、跳ぶ人形）	電波適正利用推進員協議会 土曜塾コーディネーター	29人 53人
7	13	渋木ほたるの里	竹の器作り&そうめん流し（国際交流） ※1・2年生親子参加、日本語クラブ参加	クラブネット大畑	122人
	27	油谷青年自然の家	シーカヤックに乗ろう！ ※親子参加	油谷青年自然の家	95人
9	14	長門市中央公民館	【高学年】サイエンスフェスティバルの準備 【低学年】工作（磁石のお知らせボード）	土曜塾コーディネーター	61人
	28	ルネッサながと	サイエンスフェスティバルに参加しよう	土曜塾コーディネーター	61人
10	12	長門市中央公民館	日本の遊びをしてみよう（国際交流） ※日本語クラブ参加	長門寺子屋教室、土曜塾コーディネーター	65人
	26	長門市役所新庁舎	新庁舎 施設見学	長門市総務課庁舎建設室	67人
11	9	渋木 市の尾公会堂	花尾山登山 ※親子参加	クラブネット大畑	雨天中止
	30	深川湯本周辺	電車に乗って紅葉狩り	土曜塾コーディネーター	57人
12	14	長門市中央公民館	ふかわまるごと元気プロジェクト クリスマス会（料理）	ふかわまるごと元気プロジェクト（社会福祉協議会）	71人
1	11	深川小学校、 深川中学校グラウンド	外国人と凧つくり & 凧あげ大会（国際交流） ※日本語クラブ参加	どうじん凧の会	61人
	25	ルネッサながと	歌舞伎なりきりツアー	ルネッサながと	62人
2	8	大津緑洋高校水産校舎	【中高学年】水産高校でプロに教わる料理体験	大津緑洋高校水産校舎	33人
		長門市中央公民館	【低学年】外国人とおにぎりを作ろう（国際交流） ※日本語クラブ参加	土曜塾コーディネーター	36人
	22	長門市中央公民館	伝統文化体験（お茶、かるた）	土曜塾コーディネーター	61人
3	14	長門市中央公民館	修了式（1年間のふりかえり）	土曜塾コーディネーター	71人（予定）

5月 ラグビー体験

外国出身のプロ選手と交流



7月 そうめん流し

日本語クラブの皆さんと一緒に



9月 サイエンスフェスティバル

協力してお客さんのお手伝い



10月 日本の遊び

日本語クラブとあやりの技に挑戦

1月 凧作り

昔ながらの作り方で凧を製作

2月 水産高校で料理体験

長門市名産のかまぼこ作りを体験

実施に伴う効果

塾生募集の結果、低学年が多く高学年が少ない構成になったが、高学年がリーダーとして同じ班の低学年の子どもたちを自然と手伝う様子が見られた。「長門サイエンスフェスティバル」では高学年の子どもたちを中心にブース出展をしたが、お客さんに対して積極的に手伝う等、自分にできることを考えて動いていた。

国際交流として、「ながとブルーエンジェルス」との活動を行った。英語の学習やラグビー体験を通して、外国出身者が多いコーチや選手たちと楽しく交流することができた。また、「日本語クラブ」で日本語を学ぶ市内在住外国人との活動を5回行った。ポルトガル語等の普段聞き慣れない言葉に戸惑う様子もあったが、回を重ねるごとに塾生と「日本語クラブ」の子どもたちの自発的な会話が増えていった。

苦労した点

コーディネーターの平均年齢が高くなってきており、サイエンスフェスティバルのブース出展では、思った以上に来客が多く大変だったため、コーディネーターの体力面を考慮して予定より1時間早めに終了した。それにより、保護者に早めに迎えに来てもらう等、その場でのスケジュール変更を余儀なくされた。国際交流として「日本語クラブ」の方々をお招きしたが、当日になるまで出欠が明確にならなかった。

今後の課題、発展の方向性

コーディネーターが高齢化してきているため、若い人を中心とした協力団体を見つけて、子どもたちに見合う活動の場を提供できればと考えている。また、自然体験をもっと取り入れたい。

来年度は、国際交流も引き続き取り入れながら、社会福祉協議会と協力して高齢者との交流の機会をつくる。また、市内の自然や文化を学び、長門市のものや人の良さを知ることができる体験学習を行う予定である。

活動を終えての感想・意見等

今年度は毎回子どもたちの出席率が高く、また、日本語クラブやながとブルーエンジェルス、ルネッサながと等の新たな協力団体もあり、毎回充実した活動を行うことができました。

本年度は当活動に御理解・支援いただきありがとうございました。今後においても貴財団の支援をいただくことがあるかと思っております。これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。

活動名	No.33	団体名	芦田川環境マネジメントセンター
芦田川きれい☆きれいプロジェクト 「芦田川 水辺の学び舎」		地域	広島県福山市
		代表者	田中 宏行
		支援金額	25万円

活動概要

(1) 目的

この活動は、川に入って遊ぶ機会が減っている子どもたちに、生き物調査を通じて、芦田川への興味や愛着を高め、水環境への関心をもってもらうことを目的としています。

なお、本活動は、2018年度に予定していた活動であるが台風の影響で中止となり、2019年度に持ち越しした活動です。

(2) 開催概要

■ 実施日：2019年9月29日(日)

■ 参加人数：91名(一般参加者、スタッフ含む)

(3) 活動内容

芦田川の水量や水質などの河川環境の違う2地点において、小学生などの子供たちを対象に魚とり等の体験学習会の開催。

①午前：生き物調べ（水生生物調査、魚とり調査、水質調査）

②午後：水辺の生き物マップ作成（調査結果のまとめ）

※生き物マップは後日、ホームページで公開



生き物調べのイメージ（箱メガネやタモ網、バケツを使用して親子で魚とり）



講師による生き物解説
(種類や生態に関する説明)



生き物マップづくり
(魚をみながらスケッチ)

◆実施に伴う効果

(体験学習会による効果)

- ・参加者が、川の多様な生物の存在に気づき、自然の大切さを理解し、芦田川への親しみや愛着が高まることで、水質改善に向けた意識が醸成されていると思われます。
- ・2018年の豪雨災害で、活動エリアには土砂がたまり、護岸が流されるなど、魚などの川の生き物の環境が大きなダメージを受けました。しかし、1年を経た今回調査では、もともと生息していた魚も徐々に戻ってきていることが分かり、川の生き物は、一定の時間は要するが、自然の力で元の環境に戻ることができる力強さを持っていることなども学べ、参加者にも貴重な体験ができたと考えます。

(参加者からの意見)

- ・参加者のみなさんから、“毎年参加させてもらっているの、魚の分布が分かり興味深いです” “さまざまな生物が生息しているんだと実感した” “久しぶりに子供らと川遊びが出来て楽しくて気持ち良かった” “普段遊んでいる出口川の生き物の名前が知れて良かった” などの意見があり、「芦田川への興味や愛着を高め、水環境への関心をもってもらおう」という活動目的は、達成できたと考えています。

◆苦労した点

- ・参加者が100名近くとなるため、安全に円滑にイベントを運営するためのスタッフの確保で苦労しました。運営委員を中心に、福山市、府中市、福山河川事務所等からもボランティアスタッフとして参加いただき、今年度は、更に福山大学の学生ボランティアの参加も実現できました。今後も引き続き連携を強めていくことが重要と考えています。

◆今後の課題・発展の方向性

(今後の課題)

- ・当団体は、2004年結成で、当初の活動は、当団体のメインテーマである芦田川の水環境改善について、パックテスト体験を盛り込んだプログラムを取り入れ実施していましたが、子どもたちの魚とりへのニーズが高すぎることから、時間配分を魚とりにシフトした現在のスタイル（親しみを高める方向性）となりました。今後は芦田川の水環境を楽しく学べるプログラムとして、活動の更なる充実を図っていくことが課題と考えます。

(発展の方向性)

- ・過年度に、流域に生息する貴重種のスイゲンゼニタナゴの生態や保全活動に関するミニ講座を試行的に実施したところ、参加者（特に保護者）から大変好評価が得られました。このため、今後は、この実績を参考に、芦田川の水環境と生き物などについて楽しく学べるミニ講座をプログラムに追加することにより、水環境に対する啓発効果も高める工夫が必要と考えます。

◆活動を終えての感想・意見等

2018年7月の豪雨災害で川底が削られたり、土砂で埋まったり、イベント会場となる河川は大変な状況となっていました。しかし、今年度の調査では、確認種数は減少しましたが、川底に生息する魚も見られ、元の環境が戻りつつある傾向を実感することができ、非常に感慨深い活動となりました。来年以降の活動でも、これらの変化を継続的に確認していくことで、次世代を担う子供たちに、芦田川の自然の豊かさや自然のダイナミズムを実感してもらい、身近ですばらしい自然とのふれあいの場としての芦田川を再認識してもらえればと考えております。

第35回（2019年度）マツダ財団市民活動支援贈呈式



2019年4月16日（火）広島での贈呈式（マツダ(株)本社に於いて）



2019年4月23日（火）山口での贈呈式（マツダ(株)防府工場に於いて）

マツダ財団青少年健全育成関係 研究&市民活動 成果報告会

今年度の新たな試みとして、2020年2月11日（火）に広島市西区民文化センターにおいて、研究と実践の融合、広島と山口の市民活動団体の交流を目的とした成果報告会を開催しました。今年度終了予定の研究者6名（全国）と広島県21団体、山口県11団体、総勢100名を超える方々にご参加いただきました。手作り感一杯で和やかな雰囲気の中、多くの出会いと刺激をいただきました。



小飼理事長挨拶



明石選考委員の基調講演



研究者発表風景



市民活動ポスターセッション展示



市民活動ポスターセッション風景1



市民活動ポスターセッション風景2



パネルディスカッション風景1

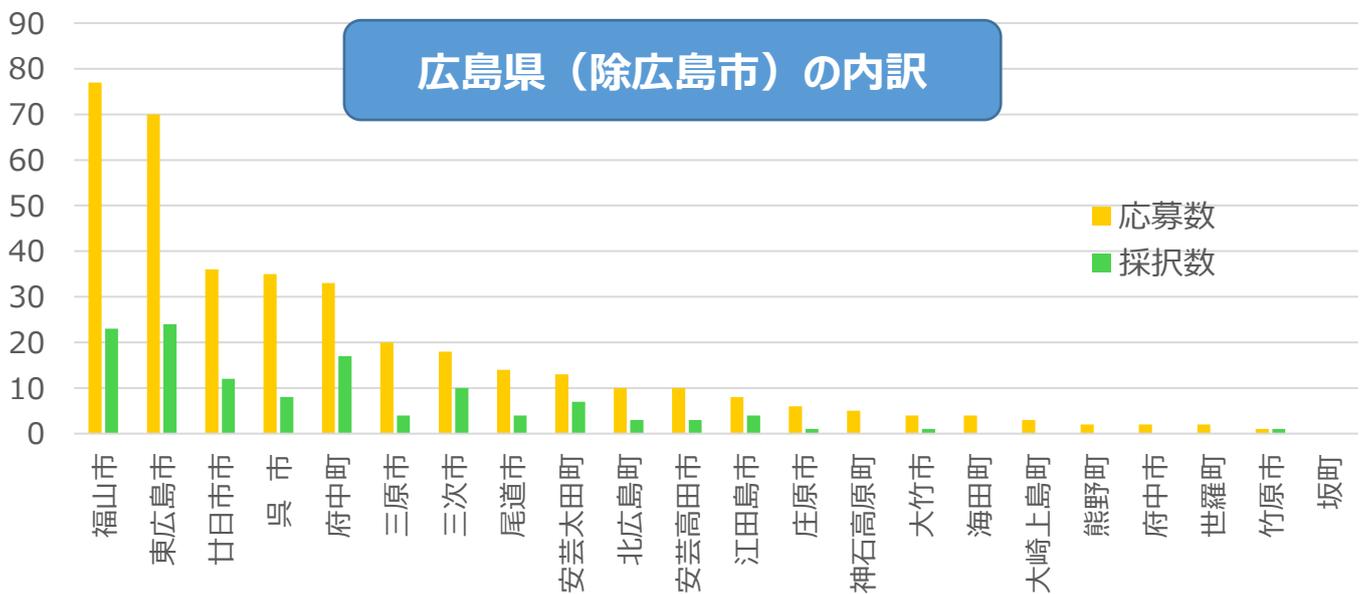


パネルディスカッション風景2

直近10年（2010～2019年）の応募件数、採択件数



広島県（除広島市）の内訳



山口県の内訳



マツダ財団の活動内容等詳細につきましては
当財団のホームページをご覧ください。

<https://mzaidan.mazda.co.jp>



マツダ財団支援 第35回（2019年度）市民活動報告書

発行者	公益財団法人 マツダ財団 〒730-8670 広島県安芸郡府中町新地3-1 マツダ(株)内 電話 082-285-4611 FAX 082-285-4612 e-mail mzaidan.sj@mazda.co.jp
発行日	2020年4月
印刷	マツダエース(株)

公益財団法人マツダ財団